

---

ヘルシング。表と闇に生きる女そして、ある少女の出会い。

Natu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヘルシング。表と闇に生きる女そして、ある少女の出会い。

### 【Nコード】

N8486M

### 【作者名】

N a t u

### 【あらすじ】

（ヘルシングとなっていますが・一応高杉さん方（吸血鬼設定）で出る予定です。コラボがお嫌いな方はお退き頂いた方が宜しいかと思えます。オリストです。ネタ浮かび次第の作成となります此方も時間かると思われます。その辺も御了承頂きますようお願い致します。何せ癖なもので・。汗連載予定です）

此処は、201X年の日本首都東京。此処に表と闇の中を生きる女

が居た。

その女の名は龍王崎茜りゅうおうざきあかね彼女は、日本の特殊ダムピール一家の龍王崎家の娘だった。彼女は炎そして雷・水そして・地面等あらゆる自然の力等を身につけている。

だが、この力を狙い・香煉館そして、他の吸血鬼達が狙い始めるようになる。

と同時にヘルシングはワカバそして日本支部の連中（夏美とライカコンビ）と共に彼女を護りながら

奴らに立ち向かうのであった。また、これを機にある戦でぼろぼろになった1人の少女とも会う事となる。

**第0夜。登場人物紹介と注意書き予定。（主な）（前書き）**

今章は、（主な）登場人物とそして注意書きを載せさせて頂く予定です。

## 第0夜。登場人物紹介と注意書き予定。（主な）

注意書き、ヘルシングのオリストですがコラボ要素も入る予定です。  
コラボがお嫌いな方もしくは戦闘がお嫌いな方……。此处でお退き  
頂く事を強くお勧め致します。

時間かかると思われます。ゆっくり更新していきたいと思っております  
ますのでどうぞ気長に温かく見守って頂く様お願いいたします。

以下主な登場人物（其れしか書きません描かない予定です。多分他  
は・・・他連載で出てくるキャラばかりだと思うので・・・使いやす  
いのです。ハイ。ごめんなさい・・・汗）

龍王崎茜彼女りゅうおうざきあかねは、日本の特殊ダムピール一家の龍王崎家の娘

炎、雷・・・水そして地面等の自然の力等を身につけている。性格は  
いたって普通また冷静と同時に何故か

セラスと気があうし、アーカードにひかれつつある。年齢は、橘夏  
美と同じ22歳。

希狭川弥生 きさがわやよい

ワカバの最年少メンバーの1人で……。年齢7歳から9歳くらい??

夏美が拾ってきた女の子。夏美の事を「夏様く!」と呼び慕っている。もちろんワカバの皆もだ。

だが、あまりに‘強力なある力’を持っている為戦闘の時や緊急時の時には19歳くらいの女の姿になる。特殊人間。

風間沙代子 かまのさしろ とある戦に参戦しぼろぼろになった少女でアーカードが見つけ連れてきた。

でセラスと同様に女吸血鬼 ドラキュリーナ 化する。年齢17歳位。

性格はセラスと同様に明るい。セラスと同様にアーカードに気に入られている。

相沢由紀子 あいざわゆきこ 闇の始末人 スナイパー の龍 ドラゴン と呼ばれている女。

夏美の闇の始末屋時代を知る1人でもある。年齢22歳。表の顔はごく普通の学生。

だが、こんな事言うのも何なんだが・・・あまりにも吸血鬼達から見れば、甘い香り' がするのでよく狙われている。

第0夜。登場人物紹介と注意書き予定。 (主な) 完 ひじまず

**第0夜。登場人物紹介と注意書き予定。 (主な) (後書き)**

ヘルシングはじまりました。個人的に以前読んだ事がありとても面白かったので(事情により売りサバってしまいました)が汗。売りサバなければよかったと後悔しています汗)オリスト形式で進めてまいる予定です。此方も時間かかりますが温かい目で見守って頂ければ幸いです。尚・他連載同様苦情等一切お受けできませんのでご了承ください。承のほどよろしくお願い致します。



## 第1夜。プロローグ。（前書き）

今章は、先にあのワカバコンビが出てきます。

車の車体番号などは正確的ではないと思いますのでその辺もご了承ください汗。

## 第1夜。プロローグ。

此処は、ワカバのアジト近辺の街郊外にあるワカバ港。

あたりはすっかり夜になっていた。

此処に黒のベンツ221Bが止まっていた。

其処によっかかっているのが・・・ワカバのリーダー兼幹部そして副リーダー兼幹部組の夏美とライカコンビである。

夏美タバコに火を灯していた。

ライカも其れに続いてタバコに火を灯す。

そしてライカ夏美を見て「・・・相棒。」

夏美も「何だ？相棒？」

ライカタバコを吸いながら「ドラゴン龍の奴がこの街にいらしい・・・  
・。そして、うちのもう一つの職場の敵陣さんもさ。」

夏美其れを聞いてめんどくさそうな顔をし「・・・たああく。面倒事メンデーになったもんだなア。

只えさえ、あの男ヒトジン、もこの場所にいるらしいみたいだかなあ。」

ライカタバコを吸いながら「・・・マジでカ。其れは其れである意味ヤバいな。」と苦笑いをして突っ込んだ。

そして夏美の携帯が鳴って夏美が出た。

相手はセラス。ヘルシングの命令オーダーが出たとの事場所は夏美達が居るワカバ港。

夏美頷き「・・・了解した。」

そう言い携帯を切った。

そしてライカは夏美を見て「・・・  
『オーダー命令か、？』」

夏美頷き「あア。場所はここだとよ（ワカバ港）」

ライカ頷きながら「そうか。了解。で？来るのか？」

夏美再度頷いた。

ライカも再度頷きがえし「そうか。了解した。」と続け様に「じゃ・・・  
行きますか？」

夏美タバコを口に加え直して「あァ・・・。そうだな。」

愛車に乗り込み再度ワカバ港の辺りを走り始めた。

第1夜。プロローグ完。

## 第1夜。プロローグ。（後書き）

今章も御付き合います。有難うございます。  
其れではほぼ毎回ですが、グタグタ予告をどうぞ。（笑）

此処はワカバ港のA-123号倉庫前。

夏美達は愛車から降りてその倉庫前に立つ。

夏美はアとため息つき「・・・何でうちの所でグール奴さん方が出てしまっ  
たのかねエ。」

ライカ「・・・諦めろ。相棒。こういう闇とああいいう倉庫は基本的に  
狙われやすいのさ。」

夏美「・・・さよか。」と続け様に「だったら・・・さっさと始めて終  
わらすか。」

するとその倉庫内から「助けてエエ!! 誰かアア!!」と女の声  
がした。

夏美その声を聞き軽めに舌打ちし「・・・人間さん、がいるってこ  
とかい!!? 厄介だな!!」

そう言い「アーカードさん達早く来てくれねえかな。」とも呟いた。

ライカフツと笑い「すぐ来るだろうさ。何せ・・・今日は、何時もより静かで良い夜、だからな。」

其れを聞いた夏美もフツと笑い替えて「・・・そうか。でも、こう言った夜に限ってなアアんか、嫌な予感、するんだよな。」

夏美「第2夜。ワカバ倉庫でグール戦そして・・・ある少女が巻き込まれる??」「次章もどうぞよろしく頼むね。」

以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。



**第2夜。ワカバ倉庫でグール戦そして・・・ある少女が巻き込まれる?? (前**

今章は、前章と同様主にワカバ組が中心となります。

長丁場等可能性あります。

## 第2夜。ワカバ倉庫でグール戦そして・・・ある少女が巻き込まれる??

此処はワカバ港のA-123号倉庫前。

夏美達は愛車から降りてその倉庫前に立つ。

夏美はアとため息つき「・・・何でうちの所でグール奴さん方が出てしまっ  
たのかねエ。」

ライカ「・・・諦めろ。相棒。こういう闇とああいいう倉庫は基本的に  
狙われやすいのさ。」

夏美「・・・さよか。」と続け様に「だったら・・・さっさと始めて終  
わらすか。」

するとその倉庫内から「助けてエエ!! 誰かアア!!」と女の声  
がした。

夏美その声を聞き軽めに舌打ちし「・・・人間さん、'がいるってこ  
とかい!?! 厄介だな!!」

そう言い「アーカードさん達早く来てくれねえかな。」とも呟いた。

ライカフツと笑い「すぐ来るだろうさ。何せ・・・今日は、'何時も  
より静かで良い夜、'だからな。」

其れを聞いた夏美もフツと笑い替えして「・・・そうか。でも、こう

言った夜に限ってなアアなか、嫌な予感、するんだよな。」

と同時にグール達が夏美達の前に一斉に現れた。

夏美何時もの様にタバコに火を灯しニヤリと笑い「奴さん方のお出ましだ。」

ライカも何時もの様にタバコに火を灯しニヤリと笑いがえし「ああ・・。そう見てエだなア。」

夏美ギンガとそしてライカは自分の武器である氷棒を取り出し「さアて・・。思いつきり暴れますか。」

そう言いグール達に、掃除を、かけ始めた。

一方遠目で夏美達を遠目で見ていた男が居た。香煉館の黒龍だった。

黒龍フツと笑い「・・・グールか。多分、ありゃ俺の所の人工グールじゃねエな。まア・・・知った事じゃねエが。‘あいつらが相手’しているんだ。楽しくなりそうだぜ。」と呟きその場をすばやく後にし心の中で。

なア？相棒そして・・・妹<sup>ライカ</sup>よ。

すると破壊音がしそして・・・。

グール達を倒しつつも母体の吸血鬼を探していた。

ライカ「・・・相棒。‘アレ’で巻き込まれた少女とそして母体吸血鬼を探せるか？」

夏美フツと笑い「やってみよう。」と言い両目をつぶり、火炎風拳火炎風透視術’を使う。

辺りを探る。

すると、グールの中で1人の母体の男吸血鬼が風間沙代子と言う女を抱きかかえていた。

夏美「・・・チィ！！中に、グール共に母体の男吸血鬼が女の子を抱きかかえているよ！！相棒！」

ライカ其れを聞いて「何！！？其れは本当か！？相棒！？」

夏美頷き「あア。」

と同時に「行くか。」と中に入ろうとした次の瞬間。

ドカアアンとドアが壊される音がした。

そして、赤いコートの男が入って行った。

・・・アーカードさんだな。ありやア。

と心の中で思った夏美達であつた。

と同時にライカ「ア、アーカード様。おっお疲れ様です。」と苦笑いをしながら言った。

そしてアーカードも夏美達を見てニヤリと笑い「あア。お前達もご苦労だな。」

と同時に夏美ライカに向かって「な、なあ・・・相棒。此処は一つ・・・アーカードさんに任せた方が良くないかい？」

ライカ其れを聞いて「・・・あのなア。此処は私ら（ワカバ）の管轄だぞ???? 退いてどーするよ? 相棒?」

と続け様に「其れにさア、アーカード様がそう簡単にうちらを解放しないって。」

夏美もから笑いをして「ハハハ。違いねえ。」

と続け様にグール共が一斉に再び夏美達の所にやって来た。

夏美其れを見てタバコに火を灯し「さア・・・再びshow time！（ショータイム）の始まりだ！！！！

うちらワカバの管轄内で暴れた事を後悔するがいいさアア！！！！グール共！！！！ワカバリーダー兼幹部

そして紅リーダー兼幹部。ヘルシング日本支部の支部員の1人この橘夏美自ら相手してやるから感謝しなァア！！！！」そう言い再びギンガを構えグール共なぎ倒した。

ライカ苦笑いをしながら頭を抱え「あア……。出ちまった相棒の暑い悪い良い癖だ。」と。

夏美はとても楽しそうにとっても楽しそうにギンガでグール共をなぎ倒していた。

一方、アーカードは其れを見てとても楽しそうに笑っていた。

第2夜。ワカバ倉庫でグール戦そして……。ある少女が巻き込まれる??? 完。



第2夜。ワカバ倉庫でグール戦そして・・・ある少女が巻き込まれる?? (後妻

今章もだいぶお久しぶりに更新完了致しました汗。

其れでは、グタグタですがほぼ毎回の恒例予告風をどうぞ。

アレから、グール達をなぎ倒して母体の吸血鬼を倒してワカバに戻ろうとした夏美達。

だが、其れを1人の男が見ていた。

夏美「・・・!!!」

と振り向くが、その男の姿は無い。

夏美「？」と疑問視をした。

と同時に「相棒!」とライカの声がする。

夏美タバコに火を灯し「んァァ・・・今行くわ。」

「気のせいかな?」

それとも・・・。

一方、夏美を見ていた男はククと笑い「見つけたぜ?、夏美。」

政宗様にご報告だな。

その男とは？？？

夏美「第3章。ワカバ倉庫でグール戦後夏美達を見ていたある男。」

「次章もどうぞよろしく頼むね！」

えーと。申し上げにくいですが、この小説も戦国BASARAの要素も入ります。その他もろもろ・・・。決まり次第またお知らせいたします。

私の小説はほとんどがこういうパターンばかりですので。

その辺もご了承のほどよろしくお願い致します。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

**第3夜。ワカバ倉庫でグール戦後夏美達を見ていたある男。（前書き）**

大分ご無沙汰して申し訳ないです。汗。

今章では、バサラ要素が入ります。

御了承のほどよろしくお願い致します。

奥州の方々です（笑）

吸血鬼設定です。

### 第3夜。ワカバ倉庫でグール戦後夏美達を見ていたある男。

アレから、グール達をなぎ倒して母体の吸血鬼を倒してワカバに戻ろうとした夏美達。

だが、其れを1人の男が見ていた。

夏美「・・・!!!!」

と振り向くが、その男の姿は無い。

夏美「？」と疑問視をした。

と同時に「相棒！」とライカの声がする。

夏美タバコに火を灯し「んァァ・・・今行くわ。」

「気のせいか??」

それとも・・・。

一方、夏美を見ていた男はククと笑い「見つけたぜ? 夏美。」

政宗様にご報告だな。

その男とは、何と、奥州会副会長であり、その会長の伊達政宗の竜の右目と呼ばれている。

片倉小十郎だった。

因みに……。

この男も政宗同様吸血鬼であり、表からそして元老院から目をつけられている危険人物。

なのだが、何故か知らないが夏美の事を知っている。

いや……当の本人がもしかしたら覚えていないだけの話かもしれない。

彼の主である独眼竜事伊達政宗は只今ある吸血鬼ハンターの手により長い眠りについていたのだが、

ある事をきっかけにその眠りが覚めてしまったのである。

すると、小十郎が黒い高級車に乗り込み「・・・どうやら。ワカバにいた事は、確かなようです。」

と後部座席に座りこんでいる男に報告する。

報告を聞いた男はニヤリと笑い「Ha! そうかい。」

と続け様に小十郎は「いかがなさいますか？ 政宗様？」

政宗再度ニヤリと笑い「そうだな。もうちつと・・・泳がせてやるか。」と続け様に「小十郎。」

暫くの間泳がせてやる代わりにお前があいつを見張ってる？ You see?」

小十郎は其れを聞いて頷き「はっ！この小十郎にお任せ下さい。政宗様。」

そして車は動き出して政宗は窓を見てニヤリと笑い小声で「どうやら・・楽しい‘Party’になりそうだ。」と続け様に心の中で、なあ？お前もそう思うだろ？My little girl？

因みに、little girlは夏美の事である。

一方、ヘルシングに戻った夏美達はとりあえずインテグラに報告をし拾った？少女はアーカードに気に入られ女吸血鬼化させられたのである。ドラキュリーナ

夏美は、部屋に戻りタバコに火を灯し先程の気配主を思い浮かべていた。

夏美は、只無言のまま心の中で・・・。

あの気配主は一体！？

私しゃアが知っている人物か??

チイ分からん。

すると、一瞬、何かの気配を感じ、

ギンガを懷から取り出し「・・・ちよいと。其処にいるの分かってんだよ?出てきな!」

するとフフと笑い声がして白い髪に紫の仮面を顔にかぶった白紫づくめの男が出てきて「・・・流石だね。

勘が良い。」と続け様に「初めまして。だよね?橘夏美君。」

夏美警戒しながら「・・・失礼。貴方何者??」



その男はクスと笑い「あア。失礼。僕は、豊臣会参謀竹中半兵衛。」

その名を聞いた夏美は驚きを隠せずに「・・・豊臣会ってあの豊臣か！？」

吸血鬼組織の中で奥州会とほぼ同格いや少々上の力を持つと言われる。

最近出てきた吸血鬼組織。

夏美半兵衛にギンガを突き付けて「・・・豊臣会の参謀の方が私じゃアにいったい何の用で?？」

半兵衛クスと笑い「・・・そんなに警戒しなくてもいいよ?僕は君とやりあいに来たわけじゃないからね。」と続け様に「・・・单刀直入に言うね。君を我ら豊臣会に出しぬきに来たのさ。」

夏美其れを聞いて嘩然として「んな？」

何で、私しゃアを！？よくわからん！！

しかし、夏美はフツと笑い「・・・何の冗談です？？」

半兵衛フツと笑い返し「・・・冗談もつもりもないさ」。只、君に興味があつてね。秀吉も君に興味を持って是非会って、仲間にしようかね。」と続け様に「中立派」ばかり名乗っているはこのワカバの組織は衰退する一方さ。その腐れ組織の一員として堕ち続ける君が忍びなくてね。」と言った。

だが其れが夏美の怒りをつつた。夏美はギンガの引き金を引き銃弾を浴びせようとした次の瞬間。

半兵衛の仕込み刀が夏美の右手をからませそこから血が滴れる。

夏美半兵衛を睨みつけながら「・・・私しやアの事をとやかく言われるのは構わんが。ワカバをとやかく言われる筋合いなんてねエ!!」と続け様に「あいにくだけど・・・この橘夏美! これからもワカバ、ヘルシング日本支部以外にお仕えする気は毛頭ねエ!」

半兵衛は「残念だ。君はもう少し利口だと思っていたよ。」と見下しながら言った。

夏美ニヤリと笑い「あいにく、私しやアはアンタほど思っているほど利口じゃないんでね! 其れに、自分の家の宿命サダメ背負っているんだ! ひっこ抜こう立ってそうはいかないよ!」と続け様に「・・・うせな!! 此れ以上私しやアの腹の虫どころが悪くなる前にね!!」

半兵衛クスと笑い「・・・また会おう。橘君。心変わりならいつでも歓迎するよ。」そう言い発破をかけ

消えた。

夏美ギンガを懷にしまいこみ軽く舌打ちして「・・・あの男。」

ヤバいな。ヤバい香りがする。と呟いて血が垂れている右手を舐めた。

夏美タバコを吸いつつ「……くそったれが!!」と呟いていた。

と同時に心の中で……。

この異様な喉の渴きは一体何だ!?

‘血を見ると飲みたくなる’

くそが!! 私、一体……。

するとワカバのアジトの向かいビルの屋上から小十郎が夏美の部屋を見ていた。

小十郎はニヤリと笑い「・・・あの男が来たか。フン。まあ良いさ。」と続け様に「・・・もう限界、だろ?? 夏美。俺達が、迎えに来る日、まで、人間として、過ごすんだな。」と意味深な発言をしていた。

第3章。ワカバ倉庫でグール戦後夏美達を見ていたある男。完。

第3夜。ワカバ倉庫でグール戦後夏美達を見ていたある男。（後書き）

今章も御付き合ひ下さいまして有難うございます。

無事に更新完了致しました。

・・って、竹中さん出すつもりなかったんだけど。出しちゃった（笑；；）

其れではほぼ毎回のグタグタ予告？をどうぞ。（笑）

夏美冷や汗をかきながら右手の傷を手当てをしていた。

だが・・・「！！んな！？」

傷が癒えている事に驚く。

何でだ？？回復龍王波使っていないのに！？

何でだ？？？回復している？？？？

私しやアは一体？？

だアアアクソ！！こうなったら寝るに限る！！そう心の中で叫びな

がらベットの所に行き寝ようとした。次の瞬間。

「夏美さアアあん!! お仕事のお時間です!!」とセラスの響き声が聞こえた。

夏美ギンガを手に持ち「だアアアもう!! 今から寝ようと思ったのに!!」

セラスウウ!! 何事だアア!!?」

セラスにこやかに「あ、夏美さん。ヴァチカンの方々が攻め（遊び）に来たんです!」

夏美タバコに火を灯し「チッ! あのメガネ神父か!! 上等じゃねえか!!」

私しやアの昼寝時間を邪魔したんだア!! 借りを返さないとなあア!!」そう言い「で? ヴァチカン連中は??」

沙代が現れて「・・・ロビーです。」

夏美フツと笑い「A l l r i g h t ! （よしわかった）じゃ行ってくるかね。」

とロビーに向けて走って行った。

セラスはその様子を見て何故か違和感を覚えていた。

・・・夏美さんって英語使ったっけ???

まさか??

まっ良いか。

すると、ロビーの所にはずでにアンデルセンとアーカードが対峙していた。

と同時に夏美ニヤリと笑い口笛を吹きながら「おっと!もう始まつてんじゃない!!お楽しみのPartyが!」と続け様に由美江が夏美に気がつき「よォ!

アンタの相手は私だよ!」と刀を向けた。

夏美タバコに再び火を灯しながらニヤリと笑い「All right!かかってきな!さア、show timeの始まりだよ!!」とギンガを懐にしまいそして翡翠刀を取り出し「Let's Party!!」と言い翡翠刀を鞘からすばやく取り出し由美江に斬りかかると同時に夏美自身も斬りかかれた。

だが、間一髪の所で交わして体制を整えた次の瞬間。

アンデルセンのバイオネットが夏美の体突き刺さろうとした。だが夏美は勘付いたのかバイオネットを手で掴んだ。

とその時「!!熱っ!!」とバイオネットを離して手を見た。

すると、手をやけどしていたのだ。

夏美茫然として「・・・馬鹿な!私は、只の、人間、なんだぞ??」

其れが何故???



と内心呟いていた。

夏美自身の体で何か起こっている事を夏美自身も知る由もなかった。

・・今は。

夏美「第4章。ワカバに突然現れたヴァチカン組そして・・・対決。と夏美の変化??（前編）」と続け様に「次章もどうぞよろしく頼むよ。」

以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

**第4夜。ワカバに突然現れたヴァチカン組そして・・・対決。と夏美の変化？？**

今章は、前編と後編にわけさせて書かせて頂く予定です。

残酷シーン等ありの予定ですので御了承のほどよろしくお願い致します。

尚夏美さんが英語使います（笑）

ですが、当方英語が得意ではありませんので御了承を・・・汗。

其れではどうぞ。

**第4夜。ワカバに突然現れたヴァチカン組そして・・・対決。と夏美の変化??**

夏美冷や汗をかきながら右手の傷を手当てをしていた。

だが・・・「!!んな!?!」

傷が癒えている事に驚く。

何でだ?? 回復龍王波使っていないのに!?!?

何でだ?? 回復している???

私しやアは一体??

だアアクソ!! こうなったら寝るに限る!! そう心の中で叫びながらベットの所に行き寝ようとした。次の瞬間。

「夏美さアアあん!! お仕事のお時間です!!」とセラスの響き声が聞こえた。

夏美ギンガを手を持ち「だアアアもう!! 今から寝ようと思ったのに!!」  
セラスウウ!! 何事だアア!!?」

セラスにこやかに「あ、夏美さん。ヴァチカンの方々が攻め（遊び）に来たんです！」

夏美タバコに火を灯し「チッ！あのメガネ神父か！！上等じゃねえか！！」

私しやアの昼寝時間を邪魔したんだア！！借りを返さないとなあア！！」そう言い「で？ヴァチカン連中は？？」

沙代が現れて「・・・ロビーです。」

夏美フツと笑い「A l l r i g h t ! （よしわかった）じゃ行ってくるかね。」

とロビーに向けて走って行った。

セラスはその様子を見て何故か違和感を覚えていた。

・・・夏美さんって英語使ったっけ？？？

まさか？？

まっ良いか。

すると、ロビーの所にはずでにアンデルセンとアーカードが対峙していた。

と同時に夏美ニヤリと笑い口笛を吹きながら「おっと！もう始まってるじゃん！！お楽しみのPartyが！」と続け様に由美江が夏美に気がつき「よォ！

アンタの相手は私だよ！」と刀を向けた。

夏美タバコに再び火を灯しながらニヤリと笑い「All right！かかってきな！さア、show timeの始まりだよ！！」とギンガを懐にしまいそして翡翠刀を取り出し「Let's Party！！」と言い翡翠刀を鞘からすばやく取り出し由美江に斬りかかると同時に夏美自身も斬りかかれた。

だが、間一髪の所で交わして体制を整えた次の瞬間。

アンデルセンのバイオネットが夏美の体突き刺さろうとした。

だが夏美は勘付いたのかバイオネットを手で掴んだ。

とその時「！！熱っ！！」とバイオネットを離して手を見た。

すると、手をやけどしていたのだ。

夏美茫然として「・・・馬鹿な！私は、只の、人間、なんだぞ？？」

其れが何故？？？

と内心呟いていた。

夏美自身の体で何か起こっている事を夏美自身も知る由もなかった。

・・・今は。

一方、その様子を遠目で小十郎が再度見ていた。

アレから、ずっと政宗の命で夏美を監視していた。

小十郎はその夏美の様子を見てフツと笑い「・・・もう直か。」と呟いていた。

一方、夏美は只唾然としていた。

何でだ！？

私じゃアは人間<sup>ヒト</sup>なはずだろう！！？

其れに何故・・・。

すると「夏さん!!」と沙代子の声が聞こえた。

夏美はフツと笑い「大丈夫だ!」そう言い再びギンガを構え直した。

そうだ!そうだ!私は・・・私は・・・。

人間なんだ!!人間なんだ!!

I Come on My little girl

!もう限界のはずだろうか??!

―俺の下へ……。―

誰だ！？？ 貴方は！？

その隻眼の眼帯。黒い髪で青の……。。

―この俺、奥州会会長伊達政宗の所へ！。

奥州会会長……。伊達政宗？？？



なぜあの、独眼竜が・・・。

私を！？意味分からねエ。

するとセラスが「夏美さん！！！！危ないです！！！」

夏美ハッと我に返り再びギンガを前に出し打ち抜いた。

と同時に再びバイオネットが降ってきた。

夏美ニヤリと笑い「・・・相変わらず手洗いご挨拶だねエ？メガネの神父さんよオ。」

アンデルセンニヤリ「久しぶりだな。ワカバの狗の小娘。今日は・・  
・お前とやりあいに来たのだよ。」

夏美タバコに火を灯しニヤリと笑い「・・そりゃあどうも。ツて言  
いたい所だけど有難迷惑だよ。アンタン所何でこうもほぼ毎回よそ  
様の所を荒らしに来るのかねエ。」と続け様に「・・まア、私しや  
アも私しやアで人の事あまり言えんが・・・。」そう言いギンガ  
を懷にしまい翡翠刀を鞘から抜き出し「ワカバリーダー兼幹部、ヘ  
ルシング日本支部支部員の1人橘夏美！いざ推して参る！！」と同  
時にアンデルセンに向かって突進して行った。

第4夜、ワカバに突然現れたヴァチカン組そして・・・対決。夏美  
の変化？？（前編）完。

#### 第4夜。ワカバに突然現れたヴァチカン組そして・・・対決。と夏美の変化？？

今章も無事に更新完了致しました。

今章も御付き合い下さり有難うございます。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ。(笑)

アレから、夏美はアンデルセンと対立し続けていた。

一方、セラス達はハインケルと由美江やその他の神父を足止めをしていた。

と同時にライカは心の中で・・・

相棒無茶しなきゃいいんだけどな。と心配していた。

そして夏美の中の変化に少しずつだが気づいていた。

ライカは後ろをフツとチラと見た。

・・・あの様子だと居るね。夏美に、変化をもたらした原因が、。

・・・何んで、よりによってあいつなんです!?

独眼竜の旦那さん。其れに竜の右目の旦那さん!!!

あいつを何故そつとしておいて下さらないんです?

本当なら・・・人間のまま(ヒト)あいつを・・・。

と同時にアンデルセンと夏美が対峙している所を見る。

アンデルセンは夏美に対して再度ヴァイオネットをくらわす。

と同時に夏美自身も交わすが本数が多すぎて交しきれていない。

夏美自身の顔から腕から血が滴れる。

夏美顔しかめて「Shit!!!クソッ!!!」

何でこんなに焼けるんだ!?

するとアーカードが前に出てきて「其処までだ。アンデルセン。次は、この私が相手しようではないか。」

アンデルセンニヤリと笑い「・・・アーカードか。」と同時に「良いだろう。」そして夏美を見て「・・・傷をいやし次第また再戦というではないか

ワカバの小娘。」と同時に由美江達に「この小娘逃がしてやれ。」

と言い頷き夏美を逃がした。

夏美は廊下でとぼとぼと歩いていた。

「クソッ!! いったいどういうこった!?! 何で……。」

焼けつくような痛み。喉の渇き。

タバコに火を灯しながら部屋に戻り「……まずは、傷の手当てと風呂だな。」

いや、その逆か。」と呟き入った。

と同時に「よオ。‘ ずいぶんと派手にやられた見てえだな’。夏美?」

と声がかかった。

夏美はその声の主を見て驚き「……かつ、片倉様!?!?!?!?!」

そう奥州会の竜の右目と呼ばれている片倉小十郎が夏美の部屋にいてニヤリと笑いながら夏美の前に立っていた。

夏美「第5夜。夏美、アンデルセンに敗れる？そして、竜の右目との再会？」「次章もどうぞ宜しく頼むね。」

以上です。御付き合いましたら有難うございます。

また宜しくお願い致します。

**第5夜。夏美、アンデルセンに敗れる？そして、竜の右目との再会？（前書き）**

大分ご無沙汰しております。

後編みたいなものです。後、夏美がですね片倉さんの名を呼んでいるんですが、

此れはいつの間にか片倉さんの事を思い出したと言う前提で一応描かせてもらっていますのでご了承ください。

長丁場編集な可能性あります。残酷等・・・。

## 第5夜。夏美、アンデルセンに敗れる？そして、竜の右目との再会？

アレから、夏美はアンデルセンと対立し続けていた。

一方、セラス達はハインケルと由美江やその他の神父を足止めをしていた。

と同時にライカは心の中で・・・。

相棒無茶しなきゃいいんだけどな。と心配していた。

そして夏美の中の変化に少しずつだが気づいていた。

ライカは後ろをフツとチラと見た。

・・・あの様子だと居るね。夏美に、変化をもたらした原因が、。

・・・何んで、よりによってあいつなんです!？

独眼竜の旦那さん。其れに竜の右目の旦那さん!!!!

あいつを何故そっとしておいて下さらないんです？



本当なら……。人間のまま（ヒト）あいつを……。

と同時にアンデルセンと夏美が対峙している所を見る。

アンデルセンは夏美に対して再度ヴァイオネットをくらわす。

と同時に夏美自身も交わすが本数が多すぎて交しきれていない。

夏美自身の顔から腕から血が滴れる。

夏美顔しかめて「Shit!!!クソッ!!!」

何でこんなに焼けるんだ!?

するとアーカードが前に出てきて「其処までだ。アンデルセン。次は、この私が相手しようではないか。」

アンデルセンニヤリと笑い「……アーカードか。」と同時に「良いだろう。」そして夏美を見て「……傷をいやし次第また再戦というではないか

ワカバの小娘。」と同時に由美江達に「この小娘逃がしてやれ。」  
と言い頷き夏美を逃がした。

夏美は廊下でとぼとぼと歩いていた。

「クソッ!!! いったいどういうこった!?! 何で……。」

後何だ！？この焼けつくような痛み。喉の渴きは！？

私しゃアは、人間だろ！？何故！？

そしてタバコに火を灯しながら部屋に戻り「・・・まずは、傷の当てと風呂だな。

いや、その逆か。」と呟き入った。

と同時に「よオ。ずいぶんと派手にやられた見てえだな。夏美？」

と声がかかった。

夏美はその声の主を見て驚き「・・・かつ、片倉様！????????」

そう奥州会の竜の右目と呼ばれている片倉小十郎が夏美の部屋にいてニヤリと笑いながら夏美の前に立っていた。

小十郎はニヤリと笑いながら「どうやら、思い出してくれた見てエだな。嬉しいぜ？夏美？」そう言いながら夏美に近づいて言った。

夏美はその姿を見て引き下がってしまった。

小十郎はクククと笑いながらも「ひでエな、そんなに、下がる事はねえだろうがよ。」と夏美に再度近づきながらも言った。

夏美自身は心の中で・・・。

ヤバいな。片倉様がついに出てきちゃったよ!? ありえねえよ・・・ってかいくら炎龍と呼ばれた私じゃアでも相手できんぞ??? と焦りながら呟いていた。

クソ!!! どうする!!!!!!? どうするよ!!!!!!? そう心の中で呟きつつギンガを懷から取り出そうとする。

と同時に次の瞬間。

ドッシュ!!!!!!!!!!!!!!!!!!

夏美の左肩に銀の刀が貫いた。

小十郎自身も驚いて「な、夏美!!!!!!!!!!」

夏美顔しかめてその場に膝を付いた。焼けつくような痛みと血の香りが夏美の辺りに漂った。

夏美の額に冷や汗が流れる。と同時に血だまり。

そして夏美は後ろを向いた。

すると其処に小さな少女がいて「・・・見つけたわよ!!! 炎龍!!!  
!!!! 水龍様と氷龍様を、裏切った、  
罪でアンタを肅清するわ!!!!!!」

夏美は苦笑いをして銀の刀を左肩から抜いた。

夏美の顔に痛みが走る。

そしてカランカランと音がして左肩をさすり回復させる。

と続け様に夏美懷からタバコを取り出し火を灯し苦笑いをし「・・・  
やっぱ、見つかったか？琴魅ことみの嬢ちゃん。」

闇の始末屋の嘗ての相棒であった水龍と氷龍側につく少女御井沢琴魅ことみ水龍と氷龍を心底敬愛しているだが、夏美自身ちゃんと水龍と氷龍に断りを入れて闇の始末屋から足を洗った。2人とも其れを了承しているはずだ。

夏美タバコを吸いながら琴魅を見てフツと笑い「・・・奴らにはちゃんと断り入れたはずなんだがな？」  
琴魅の嬢ちゃん。」

琴魅はそれを聞いて銀の刀についた夏美の血を再度振りながら向け「例え、許しがあっても！！2人を裏切った事には代わりわない！！死んで償いなさい！！！！」

夏美苦笑いしながら「・・・闇の手は振り切っても、振り切られない、か。」

「ねえ、隼人？貴方もしかしてこう言う風になる事分かって私に、継ぐな、ツて言ったの？？？」

そして夏美軽くため息をつき「・・・O k e y 来な。嬢ちゃん。」と続け様に翡翠刀を取り出し鞘から抜いて「だが、私を倒すと言うなら、簡単な覚悟じゃ出来ないって事」を思っておきな? ?? ? You s e e ? 」と真剣なまなざしで琴魅を見て言った。

だが・・・夏美自身は正直、本調子ではなかった。先程の銀の刀で血が滴れり正直貧血に近い状態だった。

第5夜。夏美、アンデルセンに敗れる? そして、竜の右目との再会? 完。

**第5夜。夏美、アンデルセンに敗れる？そして、竜の右目との再会？（後書き）**

今章も無事に更新完了致しました。

此方も御付き合ひ下さいまして有難うございます。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告風？をどうぞ。（笑）

琴魅は夏美を見て一瞬恐怖を覚えたが「水龍様達を裏切るあんたがいけないの！！！！許さない！！！！表でのうのと生きるあんたを許さない！！！！！！」

絶対に許さない！！！！」そう言い夏美に向かって銀の刀を振り始めた。

夏美は一瞬重ね合わせた。‘嘗ての幼少の自分と共に・・・メイランに捨てられた自分をそして父大樹と母楓を・・・’

夏美はフッと笑い「・・・そうかい。だが、私だってね。‘悪いけど譲れねエもんだってあるんだよ’！！！！」そう言い琴魅に向かって突進して行った。

互いに刃が混じる。

小十郎は只其れを見ていた。と同時に「相棒！！！！」とライカの声が出た。

琴魅「第6夜。琴魅VS夏美。そしてその戦いを見守る竜の右目そして・・・」「次章もどうぞ宜しく。」

以上です。此処まで読んで頂きありがとうございました。

次章もどうぞよろしくお付き合いをお願いします。



**第6夜。琴魅VS夏美。そしてその戦いを見守る竜の右目そして・・・。**

**(前書き)**

今章は前章の似た様なものです。

残酷シーン等記載されている可能性もございます。

御了承願います。

**第6夜。琴魅VS夏美。そしてその戦いを見守る竜の右目そして・・・。**

琴魅は夏美を見て一瞬恐怖を覚えたが「水龍様達を裏切るあんたがいけないの！！！！許さない！！！！表でのうのと生きるあんたを許さない！！！！！！」

絶対に許さない！！！！」　　「そう言い夏美に向かって銀の刀を振り始めた。

夏美は一瞬重ね合わせた。‘嘗ての幼少の自分と共に・・・メイランに捨てられた自分をそして父大樹と母楓を・・・。’

夏美はフッと笑い「・・・そうかい。だが、私だってね。‘悪いけど譲れねエもんだってあるんだよ’！！！！」　　「そう言い琴魅に向かって突進して行った。

互いに刃が混じる。

小十郎は只其れを見ていた。と同時に「相棒！！！！！！」とライカの声がした。

夏美は翡翠刀を琴魅の刀にぶつけながらもライカの声に気づき「来るなッ！！！！相棒！！！！！！」

ライカは慌てて「どうした！？」

続け様に夏美は「此処に、嘗ての私しやアの相棒達が、飼われてい

る嬢ちゃん、と片倉様がいるんだ!!」

ライカ驚いて「んなあアア!!!」と叫んだ。

そしてライカは心の中で・・・マジかよと呟いていた。

だが、時すでに遅しライカはすでに夏美の部屋に入っていて小十郎と眼が思わずあってしまった。

小十郎はライカの目線に気がついたのかニヤリと笑い「よオ。ライカ。久しいじゃねエか。」

ライカ頭抱えて「・・・片倉の兄様。」と続け様に「・・・相棒の様子見に来たんで、？」

小十郎懷からタバコを取り出し火を灯しニヤリと笑い「あア。そんな所さ。」

ライカは只其れを聞いて黙ってタバコに火を灯していた。

と同時に夏美を見ていた。

琴魅は相も変わらず憎悪の目で夏美を見て銀の刀を振るっていた。

と同時に夏美自身も応戦する。

お互いに刀の交わる音がする。

と同時にお互いの刃がお互いを切り付けた。

琴魅は右ほほ。

夏美は左ほほ。

互いに血が垂れる。

夏美はその血の匂いで態度には示さなかったものも……。  
参っていた’。

‘モウゲンカイダチガホシイ。  
,

‘モウゲンカイダチガホシイ。  
,

‘モウヒトデハイラレナイ。  
,

‘ミトメタハウガラクニナル。  
,

‘レイセイデイラレナクナル。  
,

と同時に夏美の額には冷や汗がかいていた。

クソ……!! 体がもう‘コタエテイルか’？

と同時に琴魅は再度夏美に斬りかかった。

「許さない！！！！！！」  
「あの方々は、許しても、私は絶対にあんたを許さない！！！！！！」

消えてなくなれ！！！！！！！！！！

するとザシュッ！！！！！！！！！！！と音がして気がつけ琴魅がその場に崩れていた。

と同時に夏美とライカはその主に眼をやり驚く。

其処には吸血鬼界の死神石田三成がいた。

夏美は琴魅を見た。だが、彼女自身はもうすでに事きれていた。

夏美翡翠刀を再度握り締めて三成を見て「……どうして？此処にいる？？石田三成？？」

三成はフツと笑いながら刀を鞘に収めて「私が此処にいてはいけないのか？橘夏美？」

三成の登場にライカも小十郎も驚いていた。

夏美は三成を睨みつけて再度翡翠刀を三成に向けて「……どうしてこいつを殺した！？寧ろ、やらなきゃならねエのは私の方だった！！！！せっかく闇と切り離されと思ったのにッ！！後彼女の憎しみを受けようと思ったのに！！！！」

ずっと追われた方が楽だ。

狙われた方が楽だ。

あいつ等が許しても彼女自身が許してくれない事等あの時目に見えていた。

すると三成は再度ニヤリと笑いながら「・・・この女は邪魔だったのだ」。私の仕事をなすべき障害なのだ。だから消した。寧ろ、感謝すべきだろう？ 本当は消えてほしいと思ったのだろうか？」

夏美は再度タバコに火を灯し翡翠刀を鞘に収めて後ろを向きながら「・・・確かに、其れは否定しねえだが。寧ろ、私しゃアは自分の過去を、自分の手で清算したかった」。只それだけよ。」そう言いながら部屋出ると同時にライカを見て「・・・後頼んだ。」

ライカはそれを聞いて何か察知したのか両肩すくめて「了解した。」そう呟いた。

と同時に夏美は小十郎を見て「・・・片倉様。」

小十郎は察知したのか部屋を出て誰もいない部屋を探し入り夏美を自分の所に寄せて「・・・どうした？」

夏美は頭をそつと小十郎の胸の中に押した。

小十郎は夏美のそんな様子を見てフツと笑いながら頬を撫でてやった。

と同時に夏美自身もいつの間にか小十郎の手に懷いていた。



第6夜。琴魅VS夏美。そしてその戦いを見守る竜の右目そして・  
完。

**第6夜。琴魅VS夏美。そしてその戦いを見守る竜の右目そして・・・**

**(後書き**

今章も無事に更新完了致しました。

此処まで御付き合い下さいまして有難うございます。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告?をどうぞ。

アレから石田三成の襲撃で幕を閉じた琴魅と夏美の戦い。

しかし、夏美自身は納得いかない気がしてならなかった。

と同時に一刻も早く何故か自分の部屋から出たい気分襲われた。

部屋にいた小十郎を呼びライカに後を任せ誰もいない部屋に入りいつの間にか小十郎の胸に頭を預けていた。

小十郎はそれを見てフツと笑いながら夏美の頬を撫でてやっていた。

夏美はいつの間にか小十郎の手に懐いていた。

夏美。第7夜。琴魅VS夏美終止符後の小十郎と夏美。

次章もどうぞ宜しく!。

以上です。其れでは次章も今章と同様に御付き合い下されば幸いです。

**第7夜。琴魅VS夏美終止符後の小十郎と夏美。（前書き）**

今章は、主に片倉さんと夏美のやり取りが中心となる予定です。

長丁場等予定です（相も変わらず・汗）

すみません。

## 第7夜。琴魅VS夏美終止符後の小十郎と夏美。

アレから石田三成の襲撃で幕を閉じた琴魅と夏美の戦い。

しかし、夏美自身は納得いかない気がしてならなかった。

と同時に一刻も早く何故か自分の部屋から出たい気分になられた。

部屋にいた小十郎を呼びライカに後を任せ誰もいない部屋に入りいつの間にか小十郎の胸に頭を預けていた。

小十郎はそれを見てフツと笑いながら夏美の頬を撫でてやっていた。

夏美はいつの間にか小十郎の手に懐いていた。

小十郎はその姿を見てククと笑い「・・・猫だなお前は。」と同時に「タバコの灰落ちるぞ。」

夏美はタバコを消し忘れた事を思い出して慌てて消して「・・・ごめんなさい。片倉様。」

小十郎は再度ククと笑いながら「いや何。かまわねエよ。」と同時に「どうしたんだ？急に？」

夏美自身苦笑いして「・・・私にもごめんなさい、よく分からない

の。」と呟いた。

と同時に「でもね・・『こうしたいのは確か』。」「小十郎はそれを聞いて満足そうに夏美を再度引き寄

せ「・・もう、『堕ちてこい』。『限界だろう?』」

『限界だろう?』

その言葉が夏美に響いた。

限界?・?・?どうなんだろう?・?・?よく分からない。

何処までが人間の自分?・?・?・?何処までが『もう一人の自分?・?・?』

でも、私しゃアは人間であり続けたい。今もそしてこれからも・・・。

と言う風に思うのはやっぱ我儘なのかな??????

そう何故か知らないけど眩きたくなった。

私の中で何かがこだまする。冷静にイラレナクナル・・・。

私は、  
'どっち' ?????

本当に、  
'どっち' ?????

'ヨクワカラナイ'

'ドコマデガヒトトノワタシ?'

‘ドコマデガヤミ（キュウケツキカ）ノワタシ？’

本当にどっち????

‘私は一体’

‘・・・どっち??’

‘ねえ、誰か教えてよ’

‘ねえ、誰か・・・。’

‘お願いだから。’

「相棒は相棒だろ!?!それ以外ねえよ!?!!」

ライカ？

「お前は私に、‘人間’<sup>ヒト</sup>、だって言ってくれた！！死女としての宿命<sup>サダメ</sup>を背負ったこの私じゃア何ざに。――

「だから、お前さんは例え、吸血鬼化、しても、私の相棒には代わらねエ、！！！！――

・・・・・・ライカ。ありがとう。

此れで、少しは私も気が楽になれるかな？？？？？？？？

そういつの間にか自分自身の中で聞こえたライカ（相棒）の声に耳を澄ませて夏美は心の中で呟いた。

第7夜。琴魅VS夏美終止符後の小十郎と夏美。完。



## 第7夜。琴魅VS夏美終止符後の小十郎と夏美。（後書き）

今章も無事に更新完了致しました。

って後半は夏美さん自身しか出てませんね（苦笑；）

それではほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ。

アレからライカは何とか三成を追い出しに成功し夏美の部屋にいた。そして夏美の変化に薄々気づいていた。

いつもの様にタバコに火を灯し壁に寄り添っていた。

と同時にタバコを吸いながら「…………相棒。」と心配そうに呟っていた。

するとセラスが入って来て「…………心配ですか？」

ライカはセラスを見て「…………セラスか。あア、まな。」とそっけなく苦笑いしながら言った。

と同時にセラスはライカを見て「…………ライカさん。マスターもインテグラ様も実は、お気づきになられていますよ？」

ライカはタバコを再度口に加え直し「…………何をだ？」

セラスはフツとため息をつき「夏美さんの人間から吸血鬼化、で

す。」

ときっぱり言った。

ライカはそれを見て只驚いていた。

第8夜。ライカとセラスの会話。そして・・・。

以上です。有難うございます。

次章もどうぞ宜しくお願い致します。

**第8夜。ライカとセラスの会話。そして・・・。(前書き)**

今章は主にライカとセラスが中心となる予定です。

此方もおそらく長丁場の編集等あります。

それではどうぞ。

## 第8夜。ライカとセラスの会話。そして……。

アレからライカは何とか三成を追い出しに成功し夏美の部屋にいた。そして夏美の変化に薄々気づいていた。

いつもの様にタバコに火を灯し壁に寄り添っていた。

と同時にタバコを吸いながら「…………相棒。」と心配そうに呟いていた。

するとセラスが入って来て「…………心配ですか？」

ライカはセラスを見て「…………セラスか。あア、まな。」とそつけない苦笑いしながら言った。

と同時にセラスはライカを見て「…………ライカさん。マスターもインテグラ様も実は、お気づきになられていますよ？」

ライカはタバコを再度口に加え直し「…………何をだ？」

セラスはフツとため息をつき「夏美さんの人間から吸血鬼化、です。」

ときっぱり言った。

ライカはそれを見て只驚いていた。

と同時に黙って窓を見ていた。

セラスは少しずつ歩いていて「気づかないとでも思いでしたか？  
’ 以前のグール戦の事を。元々闇の始末屋と呼ばれたから夏美さん  
かなり動きは良い方だと思いますけれども・・あんなにすばやくそ  
れとも‘ 楽しそうに’ やっているのを見た事ありますか？？」

ライカは黙ってタバコを吸い続けてセラスの言葉を聞いていた。

そしてセラスは続けて「其れに、第三の眼で夏美さんの体を申し訳  
ありませんが拝見させて頂いた所、  
右肩の所に‘ 小さい雷の龍の刺青’ が施されていました。これって・  
・。」

するとライカはタメ息をつき降参した顔で「・・参ったね。こりや  
ア相棒には言わない様に一応釘刺されているんだが、其処まで知ら  
れたら話すしかねえか。」と苦笑いをしてセラスを見て言った。

そして軽いため息を再度つきセラスを見て「・・何故、あいつが‘  
奥州双竜組’ に狙われているか知ってっか？」

セラスはキョトンとした顔で「夏美さんの、血、目当てですよね？」

ライカはタバコを再度口に加え直して「・・・多分其れもあると思うが、その前に・・・あいつは昔高杉様と同様に伊達様方の側にいたんだ。」

其れを聞いたセラスは驚いた。日本吸血鬼界の帝王高杉晋助の側にはいた事がある事はセラスも知っていたがだが、伊達政宗と片倉小十郎の側にいた事自体は知らなかった。

そしてライカはタバコの煙を吐きながら「・・・んでもって、お前さんが見た、雷の小さな竜の刺青、は片倉様があいつがまだそばにいた頃に与えたものなんだ。」

と同時に多分その時にあいつの血を吸いそして少量与えたんだろうな。と呟いた。

セラスはライカを見て「・・・ライカさんは知っていたのですか？  
?? 昔のその事を。」

ライカは苦笑いをしながら「多少知っているから話したんじゃないか。セラス。」

セラス「・・・そうですね。」

ライカはセラスを見て「・・・どった？気に食わなかったか？？」

セラスは首を軽く横に振り「・・・いいえ。」と呟いた。

ライカはそれを見てそうか。と軽くつぶやき窓見ていた。

一方、その様子を政宗が只見ていた。

そしてライカは、勘づたのか、「・・・伊達様。きつとご覧になっているだろうね。」とぼそりと呟いた。

第8夜。ライカとセラスの会話。そして・・・完。



## 第8夜。ライカとセラスの会話。そして……。 (後書き)

今章も無事に更新完了致しました。有難うございます。

其れではほぼ毎回ですがグタグタ予告をどうぞ。(笑)

アレからライカ達を見ていた政宗はワインを飲みながらフツと笑い「どうやら。snow girlは気づいていたみたいだな。俺が見ていたのをよ。」と同時にセラスもチラと政宗の所を見てすとライカを見始めた。

「さらに、アーカードん所のgold little girlもか。」

‘さすがあいつの従僕だ勘が良いねェ。’すると小十郎が戻って来た。

政宗はチラッと見て「戻ったか。小十郎。」

小十郎は一礼をして「ハ。政宗様只今戻りました。」

と続け様に「あいつはどうした?」

小十郎「ひとまず1人にしてくれて言われたのであの部屋にっぽ来ました。」

政宗は再度ワインを飲みながら「そうかい。」そう言い今度は夏美の所に眼を向けた。

此処は夏美の第二?の部屋。

相も変わらず冷や汗をかいていた。アレから小十郎に自身の血を飲めと言われたが何故か断った。

彼女なりの意地だったのだ。

夏美冷や汗を拭いながら「まだだッ!!!まだ墮ちる訳にはいかねエ!!!」

まだだッ!!!まだ‘奴を’、‘奴らを’……。」

倒しちゃあいねえんだッ!!!!!!

だから、こんな所で墮ちる訳にはいかねえんだ!!!!!!

だが……………。

ドクン!!!!ドクンッ!!!!!!

心音が聞こえる。

両膝を思わず床につく。息切れしながら「クソッ!time out  
か?もうか?!

冗談じゃねエぞ!!!」そう言い立ち上がりながら1つの小さな瓶を取り出した。と同時に2粒の小さな錠剤を取り出した。

「……こいつに頼らざる追えないなんてな。」そう呟きながら  
コップに水を入れその中にかした。すると血の色になった。

其れを確認した後夏美はそれを一気に飲み込んだ。

と同時にコップをテーブルに置いて「……こいつで楽に何ぞア  
レだな。」と半寂しそうに呟いた。

すると「闇の始末屋」と呼ばれた者が無様な姿ね。」と女でクス  
クスと笑い声が聞こえた。

と同時に夏美はすばやくギンガを取り出し「……何で、お前エ  
が此処にいるんだ!? 龍!?」と女を睨みつけた。

第9章。夏美本当の人間としてのtimelimit近し?そして  
嘗ての「闇の仲間」龍現る。

以上です。次章もどうぞ宜しくお願い致します。

**第9夜。夏美本当の人間としてのtimelimit近し？そして嘗ての、闇の**

今章は、主に夏美さんが中心となり、そして某吸血鬼漫画ネタが少々？入る予定です。（血液錠剤です。笑；）

此方も長丁場編集可能性等あります。

**第9夜。夏美本当の人間としてのtime limit近し？そして嘗ての、闇の**

アレからライカ達を見ていた政宗はワインを飲みながらフツと笑い「どうやら。snow girlは気づいていたみたいだな。俺が見ていたのをよ。」と同時にセラスもチラと政宗の所を見てすとライカを見始めた。

「さらに、アーカードん所のgold little girlもか。」

‘さすがあいつの従僕だ勘が良いねェ。’すると小十郎が戻って来た。

政宗はチラッと見て「戻ったか。小十郎。」

小十郎は一礼をして「ハ。政宗様只今戻りました。」

と続け様に「あいつはどうした？」

小十郎「ひとまず1人にしてくれて言われたのであの部屋にっぽって来ました。」

政宗は再度ワインを飲みながら「そうかい。」そう言い今度は夏美の所に眼を向けた。

此処は夏美の第二？の部屋。

相も変わらず冷や汗をかいていた。アレから小十郎に自身の血を飲めと言われたが何故か断った。

彼女なりの意地だったのだ。

夏美冷や汗を拭いながら「まだだッ！！！！まだ墮ちる訳にはいかな  
エ！！」

まだだッ！！！！まだ‘奴を’、‘奴らを・・・・。’」

倒しちゃあいねえんだッ！！！！

だから、こんな所で墮ちる訳にはいかなえんだ！！！！

だが・・・・・・・・・。

ドクン！！！！ドクンッ！！！！！！

心音が聞こえる。

両膝を思わず床につく。息切れしながら「クソッ！time out  
か？もうか？！

冗談じゃねエぞ！！」そう言い立ち上がりながら1つの小さな瓶を  
取り出した。と同時に2粒の小さな錠剤を取り出した。

「・・・・こいつに頼らざる追えないなんてな。’」そう呟きな  
がら

コップに水を入れその中にとかした。すると血の色になった。

其れを確認した後夏美はそれを一気に飲み込んだ。

と同時にコップをテーブルに置いて「・・・こいつで楽に何ぞア  
レだな。」と半寂しそうに呟いた。

すると「闇の始末屋」と呼ばれた者が無様な姿ね。」と女でクス  
クスと笑い声が聞こえた。

と同時に夏美はすばやくギンガを取り出し「・・・何で、お前エ  
が此処にいるんだ!? 龍!」と女を睨みつけた。

其処には龍と呼ばれた相沢由紀子あいざわゆきこがいた。

由紀子はクスクスと笑い「いや・別に久々に炎龍を見に來ただけ  
よ? でも、私が知っている誇り高き紅の龍はもう姿消したかもね  
,。」

夏美はタバコに火を灯しながら「ハッ! 言っている!!! もう、  
炎龍」と言う名何ぞアとうの昔に捨てたんだからよ。」と続け様に  
「今は、ワカバの、そしてヘルシングの、橘夏美に戻ったんだ。  
」

とさらに続けて「・・・頼むから。もう、かわるな。」そう言

い警戒心を強めた。

由紀子はそれを見て再度クスと笑いながら「・・・、かわるな、？それはひどいんじゃない？」

嘗ての、闇の仲間同士なのにね。」

其れを聞いて夏美は只只睨みつけながら「・・・うるせえ。私しやアは、表に戻ったんだ」。橘夏美として。もう、闇には呑み込まれ・・・。」するとドツクンと再度心音がした。

夏美は顔に出さないように我慢しながら由紀子を見て「とっとと失せな！！！！！！」「私しやアが刃（暴走）を向ける前にな、！！！！」

由紀子は其れを見たフツと笑い「強情な人」。『そう言いながらその場を去った。』

と同時に由紀子が居なくなつた途端夏美再度膝をつきながらテーブルにある錠剤を取り出す。

此れは血液錠剤（通称タブレット）簡単に言うとは血の代わりである。

そして、再度水に入れて溶かして飲みこんだ。



と同時に口を拭い壁に寄りかかりながら「・・・、本当に頼むから持ってくれ！！！」、人間の

私しゃアよ。、」そう呟きながらそして「・・・、何時までこいつ（血液錠剤）、に頼るんだろうね。」と苦笑いしながら呟いた。

そしていつもの様にタバコに火を灯した。

第9夜。夏美本当の人間としてのt i m e l i m i t近し？そして嘗ての、闇の仲間、龍現る。完。

第9夜。夏美本当の人間としてのtimelimit近し？そして嘗ての、闇の

今章も無事に更新完了しました。

有難うございます。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ（笑）

アレからずっと夏美は壁にタバコを吸いながらもたれかかっていた。

そして・・・。

沙代が夏美の所に来て「夏さん。『オーダー命令』だよ。」と言った。

夏美は沙代を見て頷き「了解。で？場所は？」

沙代は再度夏美を見て「ワカバ港だよ。」

夏美はそれを聞いて再度頷きながら立って錠剤とギンガを持ち「了解した。」

じゃ・・・行こうか。」と言い歩き始めた。

沙代はそれを見て「夏さん。」

夏美は沙代に振り向き「ん？」

沙代は錠剤を見て「其れ何？」

夏美はフツと笑い「・・・只の薬、さ。飲み薬、だよ。」とはぐらかしながら再度歩き始めた。

沙代はそれを見て不審に思いつつも夏美の後を追った。

第10夜。ヘルシング再度始動！そして・・・再び迫る死神？

以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

此処まで御付き合いましたら誠にありがとうございます。

**第10夜。ヘルシング再度始動！そして・・・再び迫る死神？（前書き）**

今章は主に夏美達が中心となる予定で・・・もしかしたら最後に石田さんが出てくるかもしれません。

相も変わらず長丁場等編集可能性等あります。

それではお楽しみください。

## 第10夜。ヘルシング再度始動！そして・・・再び迫る死神？

アレからずっと夏美は壁にタバコを吸いながらもたれかかっていた。

そして・・・。

沙代が夏美の所に来て「夏さん。『<sup>オーダー</sup>命令』だよ。」と言った。

夏美は沙代を見て頷き「了解。で？場所は？」

沙代は再度夏美を見て「ワカバ港だよ。」

夏美はそれを聞いて再度頷きながら立って錠剤とギンガを持ち「了解した。」

じゃ・・・行こうか。」そう言い歩き始めた。

沙代はそれを見て「夏さん。」

夏美は沙代に振り向き「ん？」

沙代は錠剤を見て「其れ何？，」

夏美はフツと笑い「・・・只の薬，さ。『飲み薬』だよ。」とはぐらかしながら再度歩き始めた。

沙代はそれを見て不審に思いつつも夏美の後を追った。

そして沙代は心の中で・・・。

アレって本当に、只の飲み薬、なのかしら???? 其れに夏さんヴァチカンと対戦して以来冷や汗かく時間が多くなったような気がする・・・。

一体何????? どうしたの???? 夏さん????? そう呟きながら歩く。

と同時に夏美は廊下でライカとセラスと出くわし「・・・行くかい? 相棒達?」

ライカ頷き「あア。行こうか? 相棒?」セラスも頷き夏美達の後に続く。

そして今回はライカの愛車に乗り込みワカバ港へと向かったのだった。

夏美は助手席で相変わらずタバコを吸い続けていた。其れも窓を見て……。

ライカはチラって夏美を見たが前を見た。

セラスと沙代子は只只その様子を黙って見ていた。

夏美は冷や汗をかき続けていた。だが苦しそうなそぶりは一切見せようとはしない。

只只、平常心、を貫き通している。

するとライカが「・・・大丈夫、か？相棒？」と心配そうに声をかけた。

夏美はフツと笑い「あア、‘大丈夫だ’。有難うな。相棒。」

ライカは頷き「あア。気にするな。」

と同時にいつの間にかワカバ港にっていた。

夏美はギンガを確認し「さてと・・・任務（mission）開始  
しますか！」そう言い車から降りた。

と同時にライカ達も降りる。

其れと同時にグール達が一齐に現れて夏美達に襲いかかって行った。

セラスクスと笑い「おいでなさいましたね。」



ライカ頷き「あア。‘おいでなすったようだ。’」と同時に夏美を見て「準備は良いか？相棒？」

夏美頷き「あア。‘何時でもOK’だ。」そして沙代子を見て「沙代アンタは？」

沙代子頷き「もっちゃん！いつでも良いよ！！さてと・・・始めようよ。‘闘争の時間を’さ。」

とはしゃいでいた。

其れを見た夏美とライカは心の中で・・・・・・・・・・。

流石は、アーカード様さんの従僕だな。と呟ささやいていた。

一方、遠目で見ている男がいた。石田三成である。

三成はニヤリと笑い「先程会ったばかりなのにまた、‘こうして会うとは’な。炎龍。いや・・。今は橘夏美だな。」そして後ろを振り向きながらククと笑い「お前が、‘此方側（吸血鬼）’についてくれる事を楽しみにしているぞ。」そう言い去って行った。

「伊達組（奴らには渡さん。）あいつはこの私のものだ。」

「貴様に拒否権はない。」

一方夏美は何かを感じたのか後ろを振り向いた。だが・・・其処には、誰もいなかった。

セラスは夏美を見て「夏美さん？」

夏美はセラスを見てフツと笑い「いや・・すまねえ。何でもねえ。」

‘気のせいかな’？いや・・・確かに其処に誰かいたはず。まだ雰囲気が残っている。

こいつは、ひょっとして・・・・・・・・・・。

一瞬夏美の脳裏に死神である石田三成が思い浮かんだ。

奴か！？（石田三成）チィまた来ていたとはね。

まアとりあえずグール共を倒すことに専念しようかね。

そしてライカ達と共にグールを倒して行った。

一方、その様子をいつの間にか来た小十郎が見ていた。

と同時にニヤリと笑い「まだ抗っている見てエ、だな。いい加減くれば良いものを。」

強情な奴だな。お前・・って奴は。なあ・・夏美。

すると、誰かの気配を感じた。

小十郎はその気配を感じたのか気配主に「・・・高杉の兄様か。」

するとクククと笑い声がして「よォ。片倉。」と高杉が出てきた。

そして、夏美達を見ていてまア正確的には夏美をだが・・・冷や汗かいていることに気づき「ククク。」

あいつも強情だねエ。すぐに血イ飲めば楽になれるものを・・。」

その事を聞いた小十郎はフツと笑い「・・気づいていたんですか？」

高杉はニヤリと笑い「俺を誰だと思ってやがる。日本吸血鬼界の帝<sup>エン</sup>王<sup>ペラー</sup>だぜ？ 後あいつだって俺の側にもいたんだよ。昔・・お前さんも気づいているだろうが・・。だからよ。あいつの事何ぞアたいいお見通し何だよ。」

小十郎再度フツと笑いながらタバコに火を灯し「・・そうでしたね。」  
「そう言い夏美達の所に眼をやった。」

第10夜。ヘルシング再度始動！そして・・再び迫る死神？ 完。

## 第10夜。ヘルシング再度始動！そして・・・再び迫る死神？（後書き）

今章も無事に更新完了致しました。

有難うございます。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ（笑；）

アレからワカバ港でグール共と対戦し続けている夏美達。

だが、グール共は退治しても一向に増えていくばかり。此れは異常だった。

夏美軽く舌打ちし「クソ！！やってもやってもきりがねエ！！異常だ！！」

何か変だ！！」

ライカも氷棒をグール共に貫かせて「ああ。其れは確かに私も思った。相棒。」と続け様に「だが此れじゃアきりがないね。セラス！沙代！！急いで

母体吸血鬼を第三の眼で探して！！見つけ次第叩くよ！！」

セラス&沙代「了解！（ヤー！）」「そう言い第三の眼で母体の吸血鬼を探し始めた。

と同時に夏美達も相も変わらずグール共をなぎ倒していく。

ライカ氷棒を構えながら「花鳥の鳥よ死の鳥よ!! 舞えよッ!! 花鳥風雲氷火斬!!!!!!」技を放ちグール共をなぎ倒す。

一方夏美ギンガの銃弾を放ちながらそして「喰らえッ!! 火炎風拳火炎風火葬龍波!!!!!!」一気に炎がグール共を包み燃やした。

と同時にセラスから知らせが入りワカバ港の第三倉庫に母体の吸血鬼を発見したと言う情報が入り夏美達は急いで向かおうとした。次の瞬間。再び夏美を‘吸血鬼化の発作’が襲う。

ライカは驚いて「相棒!?!」

夏美フツと笑い「大丈夫だ。すまねえが・・・先行っててくれ。私しやアも

すぐ行く。」

ライカは心配そうながらも頷き「分かった。先行っている。ちゃんと来てくれな?」

夏美再度フツと笑い「あア。後でな。」そう言いライカを見送った。

と同時に夏美はズボンの所から錠剤の瓶を取り出し錠剤を出して飲み込んだ。

「こいつは（あくまでも一時しのぎだ。）だが、血や輸血パックよりはましだな。一そう眩きながらも発作を抱えたままの体を支えながらもワカバの第三倉庫に走って行った。

第11夜。ヘルシングVSグール。inワカバ倉庫。そして・・其れを見る高杉達。

以上です。今章も御付き合いました有難うございます。



**第11夜。ヘルシングVSグール。inワカバ倉庫。そして・・・其れを見る高杉**

今章は前章と似た様な事になる恐れもあります。

長丁場等の編集可能性残酷シーン等あり予定です。

**第11夜。ヘルシングVSグール。inワカバ倉庫。そして・・・其れを見る高杉**

アレからワカバ港でグール共と対戦し続けている夏美達。

だが、グール共は退治しても一向に増えていくばかり。此れは異常だった。

夏美軽く舌打ちし「クソ！！やってもやってもきりがねエ！！異常だ！！」

何か変だ！！」

ライカも氷棒をグール共に貫かせて「ああ。其れは確かに私も思った。相棒。」と続け様に「だが此れじゃアきりがないね。セラス！沙代！！急いで

母体吸血鬼を第三の眼で探して！！見つけ次第叩くよ！！」

セラス&沙代「了解！（ヤー！）」そう言い第三の眼で母体の吸血鬼を探し始めた。

と同時に夏美達も相も変わらずグール共をなぎ倒していく。

ライカ氷棒を構えながら「花鳥の鳥よ死の鳥よ！！舞えよッ！！花鳥風雲氷火斬！！！！」技を放ちグール共をなぎ倒す。

一方夏美ギンガの銃弾を放ちながらそして「喰らえッ！！火炎風拳火炎風火葬龍波！！！！」一気に炎がグール共を包み燃やした。

と同時にセラスから知らせが入りワカバ港の第三倉庫に母体の吸血鬼を発見したと言う情報が入り夏美達は急いで向かおうとした。次の瞬間。再び夏美を‘吸血鬼化の発作’が襲う。

ライカは驚いて「相棒!？」

夏美フツと笑い「大丈夫だ。すまねえが・・・先行っててくれ。私しやアも

すぐ行く。」

ライカは心配そうながらも頷き「分かった。先行っている。ちゃんと来てくれな？」

夏美再度フツと笑い「あア。後でな。」そう言いライカを見送った。

と同時に夏美はズボンの所から錠剤の瓶を取り出し錠剤を出して飲み込んだ。

「こいつは（あくまでも一時しのぎだ。）だが、血や輸血パックよりかはましだな。ーそう呟きながら

も発作を抱えたままの体を支えながらもワカバの第三倉庫に走って行った。

頼むから・・・押さえてくれよ?頼むから・・・・・・。いや、大丈夫だ!絶対に大丈夫だ!!

今まで信じてやってこれたから大丈夫だ！！！！きつと・・・きつと・・・

すると前にグール共が夏美を囲い込んだ。

夏美はそれを見て自身に炎をまとい「どけエエエエエエエ！！てめェら何ゾアの相手をしている暇何ゾアアネエ！！！」そう言い「火炎風拳火炎風自然発火龍波！！！」

そして夏美にまもっていた炎が一斉にグール共を包み込んで燃やした。

其れと同時に第三倉庫へと走り続ける。

‘吸血鬼化の発作を’抱え込んだ体で。

頼むから！！持ってくれよ！！！！  
‘人間の私<sup>ヒト</sup>しゃア’！！

と心の中で呟きながら再度走り続ける。

と同時に第三倉庫に付きそしてドアを開けた途端「・・・ッ!!!」

‘ 血の匂いがする。 ’ 冷静でいられなくなる。

と同時に「ライカアアア!!! セラスッ!!!!! 沙代オオ!!!!! 無事かア!?!」

するとライカ達が出てきて「おう! 無事だ!!!」と手を挙げる。

夏美其れを確認してほっとする。と同時に「ほっとしている場合じゃないよ? お姉ちゃん。」

するといきなり風が夏美を襲った。

と同時に夏美は壁に激突する。

ライカはそれを見て「相棒ッ！」と慌てて駆け寄る。

夏美の側に来て「大丈夫か!？」

夏美頷き「あア。大丈夫だ。チィ私しゃアとした事が油断しちゃった。」と苦笑いし自分を蹴っ飛ばした

少女を見て「・・・嬢ちゃんがひよつとして、母体の吸血鬼かい？」

少女は頷きクスと笑い「そうその、ひよつとしてだよ？」ワカバのお姉ちゃん。」

夏美心の中で苦笑いをしながらオイオイ・・・よりによって子供かよ。私しゃアは基本的に子供は手エ書けない主義何だが・・・この場合だと致し方ねエな。と呟きながら懷からギンガを取り出し「悪いね。嬢ちゃん。此れ以上、グール、増やされると困るんでな。此処で散ってもらうぜ？」

少女はそれを聞いてクスクスと笑い「ひどいな。私子供なのに・・・

子供でも手エだすんだ？ワカバとヘルシングは？」

夏美タバコに火を灯しながら「勘違いするな？あんたが母体の吸血鬼だからという事で危ないから肅清するだけのこって・・普段の私しやアはそんなことしねえよ。」と言いそして引き金を引きながら「御休み。嬢ちゃん。」ギンガの銃弾を浴びせその少女は散って行った。と同時にグール達も散りになった。

一方、その様子を高杉達が楽しそうに見ていた。

と同時に夏美自身も其れを感じたのかセラス達と共に倉庫を出て辺りを見渡した。

するとセラスが「・・・夏美さん？さっきから本当にどうしたんです？」

夏美は後ろを向きながら錠剤をまたのみ込みながら「・・・さあてな。どうしちゃったんだろ？自分でも分からねエや。」と苦笑いをしながら呟いた。

と同時に「さあてと！missionも終わったし、帰るとすんべ！」そう言いライカに車を持ってくるように告げセラス達と共にライカを待ってライカが来た事を確認して車に乗り込みその場を後にした。

その様子を楽しそうに見ていた高杉ククと笑い「相も変わらず勘が良いじゃねェか。」と同時に小十郎を見て「・・・片倉。俺はこれからあいつの所に行くが。お前エはどうするよ？」

小十郎はそれを聞いて政宗に連絡を入れてフツと笑い「政宗様も御同伴でよろしいか？高杉の兄様？」

高杉はそれを聞いてフツと笑い「あア。かまわねえよ。さて・・・行くとするかね。」

俺のいや・・・俺たちの黒猫に会いに・・・。

待ってろよ？夏美？と楽しそうに心の中で呟き政宗とあとから合流し政宗達と共に夏美の所へと向かった。

第11夜。ヘルシングVSグール。inワカバ倉庫。そして・・・其れを見る高杉達。完。



**第11夜。ヘルシングVSグル。inワカバ倉庫。そして・・・其れを見る高杉**

今章も無事に更新完了致しました。

今章もご覧いただきありがとうございます。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ。(笑)

アレから夏美達はインテグラ達に報告をすませ各々が自分の部屋に戻って行った。

セラスと沙代子はアーカードの部屋にそして夏美とライカはひとまず自分の部屋へと戻って行った。

夏美は相も変わらずソファーに寝そべっていた。アレから、体調が生じ基本調子、ではないのだ。

夏美はアレから心の中で・・・。

アレから本当に、アレ（吸血鬼化発作）が早くなってきた気がする、何故だ？すると側にあった錠剤に手を伸ばしいつものように飲んだ。

と同時にクククと笑いながら「何だア？相変わらずそんなに頼ってんのかよ？。」夏美はその声を聞き慌ててソファーからとび起きその声の主を見た。

「・・・晋助様。」

高杉ニヤリと笑い「よォ。夏美ィ。」

夏美はそれを見て苦笑いをしながら心の中で

・・・晋助様がいるって事は多分政宗様方もいるね。やれやれ、ある意味災難だな。と呟いた。

第12夜。グール戦のその後の夏美達。そして夏美の部屋に現れる高杉そして・・・。次章もどうぞ宜しくね？

以上です。此処まで読んで頂き本当にありがとうございました。

また宜しくお願い致します。

**第12夜。グール戦のその後の夏美達。そして夏美の部屋に現れる高杉そして、**

今章もご覧いただきありがとうございます。

今章は前章のその後について主に書きたいと思います。

此方も長丁場等の編集可能性があります。

其れでは本編へどうぞ。

**第12夜。グール戦のその後の夏美達。そして夏美の部屋に現れる高杉そして、**

アレから夏美達はインテグラ達に報告をすませ各々が自分の部屋に戻って行った。

セラスと沙代子はアーカードの部屋にそして夏美とライカはひとまず自分の部屋へと戻って行った。

夏美は相も変わらずソファアに寝そべっていた。アレから、体調が生じ基本調子、ではないのだ。

夏美はアレから心の中で……。

アレから本当に、アレ（吸血鬼化発作）が早くなってきた気がする、何故だ？すると側にあった錠剤に手を伸ばしいつものように飲んだ。

と同時にクククと笑いながら「何だア？相変わらずそんなに頼ってんのかよ？。」夏美はその声を聞き慌ててソファアからとび起きその声の主を見た。

「……晋助様。」

高杉ニヤリと笑い「よォ。夏美ィ。」

夏美はそれを見て苦笑いをしながら心の中で

……晋助様がいてって事は多分政宗様方もいるね。やれやれ、ある意味災難だな。と呟いた。

一方、ライカは高杉達の事勘づいたのかタバコに火を灯して苦笑いをして「・・・高杉様方か。」

相も変わらずものづきな。

そしてセラス達はと言うと第三の眼でライカの様子を見ていた。

ライカは心の中で軽いため息をつき再度苦笑いをして「・・・本当に物好きな方だ。」

と同時に「・・・相棒。」と呟いた次の瞬間「!!!!」ドシュツ!!  
!と行き成りライカの胸を何かが貫いた。

其れは何と・・・刀だった。

其れも黒銀の・・・・。ライカ其れを見て血を吐き「なッ、こっ・

・こいつは黒銀!!」

するとライカはその場に膝をついてしまった。

そして・・・まさか!?

すると1人の緑色のチャイナ服を着た女が現れ「久しいわね。ライカ。」

ライカはその女を見て「て、てめェは・・・りっ、凛明!!」  
リンメイ

王・凛明。（ワン・リンメイ）香湾での闇の一族。で嘗てライカが本格的死女として動いていた時の相棒でもあった。

凛明其れを見てフツと笑い「・・・悪く思わないでくれない? うちの一族の為闇から逃れた貴女は此処で

散らなきゃならないの。」

ライカはそれを聞いて苦笑いをして「・・・悪いね。私もさ、くたばる訳にもいかねえんだよ。」だってよ・・・此処でくたばっちゃったら。」

「相棒！」

夏美<sup>あいづ</sup>が馴染みとしてか・・・1人になっちゃまうだろう？

一方、夏美はと言うとアレから高杉達と鉢合わせ続けていた。

と同時に血の匂いがほのかに舞う。

夏美は両目を見開き「・・・ライカ??」と同時に急いで雷月を持ち部屋を出た。

頼むから私からもうこれ以上・・・。

‘奪わないでくれ’。と心の中で言いながらライカの下へと走って

行った。

と同時に高杉達も夏美を追う。

そして夏美はライカの部屋に辿り着き「ライカッ！」と同時に言葉を失った。

其処には血だらけになっているライカとそして……。

「あら。こんにちは。」と笑顔で夏美に挨拶をいている凜明が居た。

夏美は凜明を帰り見もせずそしてライカに向かって行った。

と同時にライカを揺さぶり「お、オイ・・眼開けろよ。相棒。」

冗談だろう??? なァ・・。ライカの体は冷えかけていた。

と同時に夏美は凜明に「……アンタがこいつをやったのか???。」



ととぎれとぎれの声で問いかけた。

凜明クスと笑い「・・・だとしたら？」

どうするの????

夏美はそれを聞いて雷月を握り締めて「・・・ただでは帰さない。」

よくも相棒を・・・。よくも・・・。

よくも・・・。

よくも・・・。

ーよ！相棒！ー

夏美は雷月を鞘から取り出し「あの優しかった相棒をよくも！！！！相棒を返せ！！！！私の馴染みを返せエエエエ！！！！」と叫びながら雷をまとった。

と同時にいつの間にか血の涙を流していた。

そして凜明に向かって突進していった。

夏美雷月を空にかがげ「ウオオアアア……轟け！そして、唸れ！  
！我が雷よ……！雷神……！」と同時に「よくも相棒を……よくも  
ツよくもつ……！……！よくもつ……！……！よくもつ……！……！てめ  
エだけはゼツてただでは帰さなねえ……！……！覚悟しろツ……！……！」

と同時に「ヤッ止めろッ!!!相棒!!!!!!」

その声に夏美は振り向き「相棒ッ!!!」と同時に「どうしてだ!」

ライカは息切れしつつも「・・・そつ、そいつは私が嘗て死女として完全に動いていた頃の・・・相棒だった女なんだよ。だから・・・傷

つけたくねえんだ。だから、た・・の・・む。」そう言いながら血を吐きその場に崩れ去った。

夏美はその光景を見て「ライカアアアアアアアア!!!!」と叫んでその場に崩れた。

と同時に「フ、フッフ・ハッ、ハハハハハハハハハハ……！」と笑いながらそして「うアアアアアアアアアアアア……！！！」と叫びながら、血の涙を再度流していた。

そしてゆつくりと立ち上がり「……すまねえ、相棒。今回はその願いは聞けそうにねえ。」と同時にフラフラとしながら「……今の私しやアはこの女をやらねえと気が済まねえんだ。」怨んでもかまわねえ。憎んでもかまわねえ。だが、此れは今回は譲れねえ。」そう言いながら再度雷月を凜明に向けて「……私しやアはお前を許さねえ。」散りな。」と同時に雷をまとい「我が雷よ。轟け！そして、唸れ！！！再大力雷神ッ！！」そう叫びながら凜明を攻撃しくらわせ散らした。

と同時に凜明は散る間際「……ごめ、ん、ね。う、い、か。」  
 と言ひ残して言った。

「愛されていたのね。いろんな人に・貴女は。よかったわね。ラ  
イカ・。—

そして夏美は雷月を鞘に収め「……なら、どうして。‘やったんだよ！’大事に思っているのであれば……！」クソ……！と同時にライカの方を向いたが……ライカの姿はなかった。

夏美はライカが居た所に驚きながらもしやがみ「……何処に行っただ……？相棒……？」

すると其処に高杉達が再度来ていて高杉は夏美に近づき抱きしめた。

と同時に夏美は高杉に「……相棒連れて行ったの晋助様？」

高杉は首を横に振り「残念だが……俺達ではないんだな。’」

夏美は不安そうに「じゃ……誰……？」

すると「夏美の姉御オオオオ……！大変だアア……！うちの情報部の監視カメラに石田三成が映っている

ライカの姉御を連れ去って行ったアア……！」と雷外の声がした。

夏美はそれを聞いて急いで高杉の側から離れ雷外の所に行き「何！

!!? 其れ本当か!?! 雷外!?!」

雷外頷き「兄さんと情報部の連中が確認しボスたちにも見せたから確かだよ。」

夏美頭をクシャとしながらそしてタバコにいつものように火を灯し「・・・、そうか、」分かった。」と同時に歩きだした。

雷外は夏美を見て「姉御? 何処行くの??!」

夏美タバコ吸いながら「一度部屋に戻りライカの奴を迎えに行く。あいつの居場所探れ。」

雷外不安そうに「1人で大丈夫? あノ男姉御も目当てみたいだよ?」

夏美は後ろを振り向きフツと笑い「大丈夫だ。平気さ。」と言い部屋に戻った。

すると今度は政宗が小十郎を見て「・・・小十郎。」

小十郎頷き「承知！」そう言い夏美の後を追った。

雷外も部屋に戻ろうとした時に高杉に声をかけられ「ハイよ。高杉の兄貴様。」

高杉は雷外を見て「・・・此れ以上奴の好きにいや奴らの好きにはさせねえ。’人工の連中の生み場所探ってくれ。’此処は俺のいや俺たちの管轄内だからよ。」

雷外フツと笑い「了解！」そう言い去った。

一方、自分の部屋に戻った夏美は人休憩しようとした次の瞬間にまたまた‘吸血鬼化の発作に’襲われてしまう。

と同時に再度錠剤を今までは3つだったのが・・・4つになりいつの間にか合計で7つになっていた。

夏美その場に崩れて「・・・ハハ。‘個数が増えてやんの。’」と笑ったと同時に眼の前に‘輸血パック’が放り出された。

と同時に夏美の眼の色が深紅に変わった。

第12夜。グール戦のその後の夏美達。そして夏美の部屋に現れる高杉そして・・・完。

## 第12夜。グール戦のその後の夏美達。そして夏美の部屋に現れる高杉そして、

今章も無事に更新完了致しました。

そして今章も御付き合い下さいまして有難うございます。

其れではほぼ毎回のグタグタ？予告風をどうぞ（笑）

相も変わらず‘吸血鬼化の発作’に苦しんでいる夏美の目の前に輸血パックが放り出された。

と同時に夏美の眼の色が深紅色に変わっていた。

夏美は驚きながらも「ゆ、輸血パック？」

血を見るたんびに・・・何故か欲しい’と思う自分がある。

すると「‘本当ならもう限界だろう？夏美？’飲むが良い。」と女の子の声がした。と同時に其処にはヘルシング局長のインテグラと小十郎が居た。

夏美驚きながら「イ、インテグラ様に・・・片倉様！」

小十郎顔しかめながら夏美の側にやって来て「たくよ・・・こんなになるまで我慢しやがって！もう限界なんだろう！？認めるよッ！血を欲しがっているお前が居るんだ。」

夏美口をかみしめながら「・・・せつかく父さんたちが遺してくれた私の大切なもう一つの居場所をなくしたくなかった！！！！’只でさえ・・・吸血鬼は世間者の‘化け物とみなされているのに・・・’私じゃアだってそれ以前に‘闇の始末屋炎龍で恐れられていたのに



！、まア此れは自業自得だけど……。妹にまでそのレッテルをはりつけたくなかった！！！」と同時に涙を流して「……。広州のメイランとは、人間のままでの私と決着付けたかったのよ。」だから私はまだ、人間ではなくてはいけないの、とも付け加えた。

すると小十郎が悲しそうな顔をして苦笑いし夏美の頭を撫でて「……。そうか。悪かったな。俺の想いが裏目に出てお前を……。」「苦しめていたんだな？

夏美其れを聞いてはっと我に戻り首を横に振った。

と同時に「違います！片倉様！私……私は……。そう言うつもりじゃなかった。」そして小十郎に抱きついて「……。晋助様同様大切な人。悲しませるつもりじゃなかったの。」と同時に「私の変化で……。今の相棒達を失うのが怖かった。」すると「夏美。」と男の声がした。

その声を聞いた夏美は慌てて小十郎から離れてその男の前に座り会釈する。

「……。兄様。」ワカバの首領で夏美達の兄貴分である陳・オウガだ。

オウガは夏美を見て「……。何故だまっていたんだ？例えお前が吸血鬼化しても、お前は俺の妹分と部下には代わりわねえんだ。」だってよ、実際にインテグラの所だってアーカードやセラス、沙代子だって吸血鬼じゃねえか。寧ろ俺は、無理をして人間と吸血鬼の変化の狭間で苦しんでいるお前を見るのがとても辛い。」夏美はそれを聞いて驚いて「……。例え吸血鬼化しても貴方様をお守りする気持ちは変わりはありません。」吸血鬼化しても今まで通

り御側に置かせていただけるんですか？」

オウガ其れを聞いてフツと笑い「・・・、当たり前だろ、？何せお前は・・・俺たちの大事な、もう一人の家族なんだからよ。」と同時に「な？そうだろう？お前等？」

するとワカバのメンバーが一斉に入って来て「姉さんが例え、吸血鬼化しても、俺達もアーカードさん達見えますから見慣れていますから大丈夫ですよ。いやむしろ・・・、夏美の姉さんじゃなきゃ・・・。ライカの姉さんじゃなきゃ・・・。」と同時に雷外も入って来て「俺も含めて皆・・・ボスや姉御達の、暖かさ、にひかれてそして、優しさに、引かれて来たんだ。寧ろもし姉御が代わっちゃまうんだったら俺達が嫌な方じゃなくて良い方につれもどしてやっからさ。だから・・・、無理しないでくれよ。」夏美の姉御。」

夏美はその言葉を聞いて思わず「・・・兄様。其れに相棒達に雷外。」

「愛されているんだな。私しやア。でも・・・本当にいいのかな？」すると亜理紗が来て「まだ悩んでいるんですよ？、此れでいいのかな？って。良いに決まっているでしょ！！」そう言いクスと笑いながら度付いた。

夏美は再度タバコに火を灯し「・・・今はまだ無理だ。だが、いずれかは飲むよ。其れまでは・・・」錠剤を取り出して「こいつで良い。」そう言い部屋の奥へと入って行った。

小十郎は夏美の姿を見ていた。オウガ達もそうだ。

そして、高杉と政宗が合流してきた。

第13夜。‘幾度なく続く吸血鬼化の発作に苦しむ夏美がついに決断？’

以上です。次章もどうぞ宜しくお願い致します。

此処までご覧いただきありがとうございました。

第13夜。‘幾度なく続く吸血鬼化の発作に苦しむ夏美がついに決断？’

（前書

今章もご覧いただきありがとうございます。

今章はインテグラさんそしてワカバのボスであるオウガさんも出てくる予定です。

後インテグラさんは薄々夏美の変化に気づいていました。この先はネタばれに一応なりかねないので・・・お楽しみにと。

なお此方も長丁場等になる恐れもございますので予めご了承ください。  
い。

其れでは本編へどうぞ。

第13夜。‘幾度なく続く吸血鬼化の発作に苦しむ夏美がついに決断？’

相も変わらず‘吸血鬼化の発作’に苦しんでいる夏美の目の前に輸血パックが放り出された。

と同時に夏美の眼の色が深紅色に変わっていた。

夏美は驚きながらも「ゆ、輸血パック？」

血を見るたんびに・・‘何故か欲しい’と思う自分がある。

すると「‘本当ならもう限界だろう？夏美？’飲むが良い。」と女の声がした。と同時に其処にはヘルシング局長のインテグラと小十郎が居た。

夏美驚きながら「イ、インテグラ様に・・片倉様！」

小十郎顔しかめながら夏美の側にやって来て「たくよ・・こんなになるまで我慢しやがって！もう限界なんだろう！？認めるよッ！血を欲しがっているお前が居るんだ。」

夏美口をかみしめながら「・・・‘せっかく父さんたちが遺してくれた私の大切なもう一つの居場所をなくしたくなかった！！！’只でさえ・・吸血鬼は世間者の‘化け物とみなされているのに・・’私しやアだってそれ以前に‘闇の始末屋炎龍で恐れられていたのに！’まア此れは自業自得だけど・・。妹にまでそのレッテルをはりつけたくなかった！！！」と同時に涙を流して「・・・・広州のメイランとは‘人間のままでの私と決着付けたかったのよ。’」だから私はまだ‘人間ではなくてはいけないの’とも付け加えた。

すると小十郎が悲しそうな顔をして苦笑いし夏美の頭を撫でて「……そうか。‘悪かったな’。‘俺の想いが裏目に出てお前を……。’」苦しめていたんだな？

夏美其れを聞いてはっと我に戻り首を横に振った。

と同時に「違います！片倉様！私……私は……。そう言うつもりじゃなかった。」そして小十郎に抱きついて「……晋助様同様大切な人。悲しませるつもりじゃなかったの。」と同時に「私の変化で……今の相棒達を失うのが怖かった。」すると「夏美。」と男の声がした。

その声を聞いた夏美は慌てて小十郎から離れてその男の前に座り会釈する。

「……兄様。」ワカバの首領で夏美達の兄貴分である陳・オウガだ。

オウガは夏美を見て「……何故だまっていたんだ？‘例えお前が吸血鬼化しても、お前は俺の妹分と部下には代わりわねえんだ。’だってよ、実際にインテグラの所だってアーカードやセラス、沙代子だって吸血鬼じゃねえか。寧ろ俺は、‘無理をして人間と吸血鬼の変化の狭間で苦しんでいるお前を見るのがとても辛い。’」夏美はそれを聞いて驚いて「……‘例え吸血鬼化しても貴方様をお守りする気持ちは変わりはありません。’吸血鬼化しても今まで通り御側に置かせていただけるんですか？」

オウガ其れを聞いてフツと笑い「……‘当たり前だろ’？何せお前は……俺たちの大事な‘もう一人の家族なんだからよ。’」と同

時に「な？そうだろう？お前等？」

するとワカバのメンバーが一斉に入ってきて「姉さんが例え、吸血鬼化しても、俺達もアーカードさん達見ていますから見慣れていますから大丈夫ですよ。いやむしろ・・・、夏美の姉さんじゃなきゃ・・・。ライカの姉さんじゃなきゃ・・・。」と同時に雷外も入ってきて「俺も含めて皆・・・ボスや姉御達の、暖かさ、にひかれてそして、優しさに、引かれて来たんだ。寧ろもし姉御が代わっちゃうんだったら俺達が嫌な方じゃなくて良い方につれもどしてやっからさ。だから・・・無理しないでくれよ。」夏美の姉御。」

夏美はその言葉を聞いて思わず「・・・兄様。其れに相棒達に雷外。」

「愛されているんだな。私しやア。でも・・・本当にいいのかな？」

すると亜理紗が来て「まだ悩んでいるんでしょう？、此れでいいのかな？って。良いに決まっているでしょ！！」「そう言いクスと笑いながら度付いた。」

夏美は再度タバコに火を灯し「・・・今はまだ無理だ。だが、いずれかは飲むよ。其れまでは・・・」錠剤を取り出して「こいつで良い。」「そう言い部屋の奥へと入って行った。」

小十郎は夏美の姿を見ていた。オウガ達もそうだ。

そして、高杉と政宗が合流してきた。

小十郎は高杉達に一礼をし高杉達の所に戻った。

政宗は小十郎を見て「夏美の奴はどうした？」

小十郎は奥を差し「自分の部屋の奥部屋です。」

政宗頷き「O K a y。」そう言い奥の方に進んだ。

高杉もその様子を見て「・・・その様子だとまだ血イ拒んでいる見てえ、だな。」

小十郎其れを聞いて頷き「ハイ。まア・・・あいつにはあいつなりの理由があるらしいですが。」

でも、このままだとお前が苦しむばかりだぜ？夏美？

一方、夏美は自分の部屋の奥の部屋で相も変わらず、吸血鬼化の発作に苦しみつつづけていた。



夏美「・・・ッ!!!!」と顔をしかめる。

「いつも以上に渴く喉が・・・渴く。発作が早い!!!!」

クソッ!!!! そう心の中で呟きながら再度錠剤に手を伸ばし大量に飲んだ。

夏美一呼吸をしてベットに座りタバコに火を灯した。

・・・どうしてこうも? 早いんだ?? そう呟きながら再度錠剤に手を伸ばしたのみ込む。

すると「オイオイ・・・まだそんなもんに頼ってんのかよ? My little girl?」

夏美はその声を聞きすぐその声の主が分かったので見た「・・・政宗様。」

政宗は夏美の側に歩いて来ていた。

そしてタバコを夏美の口から離して火を消し自分の腕の中へと抱き寄せ「・・・もう限界だろう？」「このままだと本当に壊れてしまうぜ？」「

政宗自身も人間が吸血鬼化する場面を何度か見て来ていた。

余りにも血を我慢しもがき続けそして最後には自我を失い破滅する。

そう言った場面もいくつか見て来たから夏美自身にはそうなってほしくはなかった。

手当たり次第人間を襲う。

そうまるで人形のように・・・。

政宗は輸血パックを懷から取り出し「ほらよ・・・。飲め。夏美。  
‘今のお前ならまだ首筋から飲むのは酷だろうよ。’」と夏美に渡す。

だが夏美はそらそうとする。まだ、‘飲みたくない’。と言っているかのように・・・。

第13夜。‘幾度なく続く吸血鬼化の発作に苦しむ夏美がついに決断?’ 完。

**第13夜。‘幾度なく続く吸血鬼化の発作に苦しむ夏美がついに決断？’**

**（後書**

今章も無事に更新完了致しました。

有難うございます。其れではほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ。（笑）

まだ駄目だ。嫌だ・・・・・・・・・・。

いくらなんでも・・・・・・・・・・。まだ。

‘あの女を・・・・・・・・’。

すると政宗は輸血パックの封を切りそして自分の口に含ませ夏美に口づけを落としたと同時に夏美に飲ませた。

どうして!?!? まだ・・・・・・・・。決着が!!!!!! あの女との・・。

シャアアアメイ  
ー夏美ー

メイランッ!!!!!!

其れとは裏腹に夏美自身は政宗から与えられた輸血パックの血を受け入れていた。

あア・・・・もう終わりか? ‘人間<sup>ヒト</sup>としての’

あっけねエ。でも悪くはねエ・・・・・・・・・・。

そう呟きながら両目を閉じた。

第14夜。夏美吸血鬼としての覚醒？

以上です。次章もどうぞ宜しくお願い致します。

有難うございます。

## 第14夜。夏美吸血鬼としての覚醒？（前書き）

新年明けましておめでとうございます。昨年度は大変に御世話になりました。ご観覧頂きありがとうございます。

其れでは新年早々一発目の更新となります。

主に、政宗さんと夏美が中心です。

長丁場等残酷シーンあり予定です。（此方も）御了承下さいますよう重ねてお願い致します。

## 第14夜。夏美吸血鬼としての覚醒？

まだ駄目だ。嫌だ・・・・・・・・・・。

いくらなんでも・・・・・・・・・・。まだ。

‘あの女を・・・・・・・・’。

すると政宗は輸血パックの封を切りそして自分の口に含ませ夏美に口づけを落としたと同時に夏美に飲ませた。

どうして！？まだ・・・・・・・・。決着が！！！！あの女との・・。

――夏美――  
シャアアアメイ

メイランッ！！！！

其れとは裏腹に夏美自身は政宗から与えられた輸血パックの血を受け入れていた。

あア・・・・もう終わりか？ ‘人間<sup>ヒト</sup>としての’

あつけねエ。でも悪くはねエ・・・・・・・・・・。

そう呟きながら両目を閉じた。

政宗は夏美に血を与えた後ベットに寝かせ頭を撫でながら「・・・

sorry。でも、‘こうもしないとお前はまたずっと苦しむことになるだろう?’」

早く・・あの発作の地獄から抜け出させてやりたかったんだ。

そして再度頭を撫でて「goodnight。my little girl。」そう言いながら側にいた。

するといつの間にかライカ達と合流したセラスが何かを感じて「・・・どうやら。‘なったみたいです’。」

インテグラも葉巻に火を灯し「そうか。」と続け様に「多分伊達の奴がしたんだろうな。」と同時にオウガを見て「・・夏美の奴をあいつは知っているみたいだが、関係は？」と聞いた。

オウガタメ息をつき「・・・・昔馴染みだよ。インテグラ。」

と続け様に「まア、事情しらねエわけねえんだが・・言うとかいつにどやされるかのせいもあるからな。

すまねえ。」そう言い部屋を去った。



するとインテグラはセラスを見て「セラス。」

セラスは何かを感じたのか頷き「ハイ。インテグラ様。」そう言い  
オウガに続くように去って行った。

一方、政宗はアレからずっと寝ている夏美の側にいた。

と同時に高杉と小十郎が入って来た。

政宗は高杉達に気づき軽く挨拶して高杉も軽く挨拶返して小十郎も  
一礼し夏美を見て「眠っているんですか？政宗様？」

政宗頷き「あア。眠っているぜ。余程疲れたんだろうな。‘アレ（  
発作）’、だよ。」

小十郎はそれを聞き「左様で。」

すると高杉はテーブルに置いてあった錠剤の殻瓶そしてまだ錠剤入  
りの瓶を見て「……こいつ結構飲んだ見てえだなア。量がかな

り減っていやがるし・・・他の瓶も空になってやがる。」

小十郎はそれを聞き「・・・余程飢えていたのでしょうな。只・・・錠剤（此れ）は単なる一時しのぎにすぎません。」

政宗頷き「Ya。そうだな。」

一方高杉はアレからオウガ達の様子が気になったのか透視をし始めていた。

廊下・・・。

オウガは1人で歩いていた。と同時に止まってフツと笑い「出てきたらどうだ？ いるんだろ？ アーカード。セラス。」

すると壁からアーカードが、そして廊下から普通にセラスが登場し、アーカードフツと笑い「気づいていたのだな？ 私達がいることに。」

オウガフツと笑いながら「まァ・・ほぼ毎回見ている光景だからな  
其れくらいはな。」

セラスはオウガに「・・オウガ様。」

オウガセラスを見て「ん？どうした？」

セラスはオウガを見て「・・、本当に夏美さんと伊達の双竜組、は  
昔馴染みだけなのでしょうか？」

と問いかけた。

オウガは苦笑いをして「少なくとも、俺はそう聞いている、。だが・  
・俺自身もあまりよくこれに関しては知らんのだ。すまんな。」

すると、アーカードはニヤリと笑い「、本当に知らんのか？、」

オウガ再度フツと笑い「あア、‘知らん’。すまんがな・・寧ろ、  
夏美<sup>あいづ</sup>自身はあまり過去に振られるのを好まん。」

すると雷外が廊下を走って来て「ボーーーーーooooooooooooッス！  
！！！！！！」

オウガは雷外を見て「おう！どうした！？」

雷外は慌てながらも「たった今ですが・・兄さんから情報入りました  
て石田三成の居場所が分かりました。」

オウガはそれを聞いて「何！？で？場所は？？？」

雷外はオウガを見て「うちの管轄内であるワカバ港の倉庫の裏側  
にある黒い洋館です。」

オウガ頷き「そうか。じゃ・・ライカもそこにいるってことか？」

雷外頷き「恐らく。」

オウガ再度頷き「了解した。じゃ・あいつを迎えにいかねエとな。  
‘起きたんだろ’？夏美？」

すると背後から足音が聞こえ「ハイ。兄様。」と其処には‘吸血鬼  
化’した夏美がいた。

オウガフツと笑い「調子はどうだ’？」

夏美もフツと笑い「悪くはありませんよ、兄様。」と同時に「ご  
命令を。」

オウガ再度フツと笑い「俺等の管轄内のワカバ港の倉庫の裏にある  
黒い洋館に向かい、ライカを迎えに行ってやってくれ。」

夏美一礼し「ハッ！只今ッ！」そう言いその場を去り管轄内のワカ  
バ港の倉庫裏にある黒い洋館へと向かって行った。

するとアーカードもニヤリと笑い「オウガ。私も行って良いかね？」

オウガ苦笑いをして「インテグラにちゃんと言っておけ。俺はお前さんの主ではないからな。」そう言い自分の部屋に戻って行った。

と同時にアーカードは後ろをチラって見て「いかがか？我が主？」  
と再度ニヤリと笑いながら見て言った。

すると背後からインテグラが出てきてフツと笑い「行ってこい、我が従僕よ、」

アーカードはそれを聞いて再度またニヤリと笑い「了解。我が主。」  
と同時にセラスを見て「行くぞ！」

セラス。そして・・・いるのだろうか？沙代。」

すると沙代子が笑顔で飛び出て来て「ネエ？、お仕事（闘争）、？  
？主様？？？？？」

アーカードはそれを見てクククと笑い「あア。‘仕事’だ。沙代。」

沙代子は思いつきり喜んで「わーい。わーい。‘お仕事’、‘お仕事’。」と言った。

インテグラとセラスはそれを見て只クスと笑っていた。

一方、夏美は自分の愛車である黒のベンツに乗り込んでその様子を  
楽しそうに見ていた。

タバコに火を灯しながら「・・・‘お仕事ねエ’、スongoく喜ぶとは思わなかったな。」と同時に苦笑いして「で？本当に宜しいので？  
政宗様???」

政宗はニヤリと笑い「あア。Don't worry!だ。」

夏美はそれを聞いて再度苦笑いし「・・・護衛も付けずに後で片倉様に叱られてもしりませんよ?」

そう言いベンツを発進させた。

と同時に黒のフェラーリも付いて来ていた。そう・高杉の愛車だった。

第14夜。夏美吸血鬼としての覚醒？完。



## 第14夜。夏美吸血鬼としての覚醒？（後書き）

今章も無事に更新完了致しました。

此処まで読んで頂きありがとうございます。

其れではほぼ毎回？のグタグタ予告風をどうぞ（笑）

此処はワカバ港に続く道路。其処には夏美の愛車である黒ベンツと高杉の愛車である黒のフェラーリが通っていた。

夏美は前の車のミラーを確認し苦笑いをしていた。

政宗はそれを見て「Hey! 夏美どうした？」

夏美はタバコ吸いながら再度苦笑いをし「晋助様の愛車がついてきていて

助手席には、‘ 凄い顔 ’ の片倉様が乗っています。」

政宗其れを聞いて苦笑いをして「夏美・・・ 巻け、ねえか？」

夏美はそれを聞いて再度苦笑いをし首を横に振り「・・・この道が近い様なもので申し訳ないですが・・・無理そうですね。」と言った。

政宗は軽くため息をつき「All right. じゃ・・・そのまま進んでくれや。」

多分後で小十郎の小言聞かされると思うが。」

夏美はそれを聞いてハハハと苦笑いしながら車を出した。

第15夜。夏美吸血鬼化してからの初仕事。相棒救出？

以上です。有難うございます。其れでは次章もどうぞ宜しくお願い致します。

**第15夜。夏美吸血鬼化してからの初仕事。相棒救出？（前書き）**

今章も前章と多少似たような内容となる予定です。

長丁場編集可能性等ありの予定でもあります。

## 第15夜。夏美吸血鬼化してからの初仕事。相棒救出？

此処はワカバ港に続く道路。其処には夏美の愛車である黒ベンツと高杉の愛車である黒のフェラーリが通っていた。

夏美は前の車のミラーを確認し苦笑いをしていた。

政宗はそれを見て「Hey! 夏美どうした？」

夏美はタバコ吸いながら再度苦笑いをし「晋助様の愛車がついてきていて

助手席には‘ 凄い顔 ’ の片倉様が乗っています。」

政宗其れを聞いて苦笑いをし「夏美・・ ‘ 巻け ’ ねえか？」

夏美はそれを聞いて再度苦笑いをし首を横に振り「・・この道が近い様なもので申し訳ないですが・・無理そうですね。」と言った。

政宗は軽くため息をつき「All right. じゃ・・そのまま進んでくれや。」

多分後で小十郎の小言聞かされると思うが。」

夏美はそれを聞いてハハハと苦笑いをしながら車を出した。

黒のフェラーリも其れに続いた。

そしてタバコに火を灯しつつも心の中で・・・・・・・・。。

今行くからな？無事でいてくれよ？相棒？

とライカの無事を願うばかりだった。

一方、此処はワカバの倉庫の裏の洋館。

ライカはその洋館のある部屋で寝かされていた。

ライカはフツと眼が覚めて起きあがりながらも体に痛みを感じ体を支えながらも辺りを見渡し「・・此処はってか。私は確か凜明の奴にやられたはずなんじゃないのか？？？？？」

其れにこの包帯は・・・・・・・・。。

すると1人の少女が入って来た。

ライカは驚き「誰だ？」

するとその少女はしーっとして小声で「ライカ・ネアンさんですね？私は龍王崎茜。貴女を助けに参りました。」と続け様に「只今、貴女の相棒である橘夏美さんが此方に向かって行っています。」

ライカはそれを聞いて龍王崎だって！？確か特殊ダムピールの一族の・・・。

茜はさらに続けて小声で「貴女は凜明にやられた後いつの間にか死神に此处へと連れて行かれたようなのです。」

その事を聞いたライカはさらに驚いたと同時に心の中で石田三成がまた来ていたのか・・・。

そしてライカを連れて出ようとしたその時背後からいきなり刀が振り下ろされた。

と同時に茜も其れを迎え撃った。

その主は三成だった。

三成はニヤリと笑い「どんな侵入者が来たかと思えばアレか、龍王崎の所の小娘か。」

茜は顔しかめて「・・・石田三成。」

ライカも其れを見て顔しかめつつも氷棒を取り出しながらベットから抜け出し三成を睨みつける。

三成はライカをも見てニヤリと笑い「目が覚めたか？ライカ・ネアン。せっかく手に入れたものをやすやす逃がすものか。」

するとドカアアアアン！！と音がして「何処だアア！！！！相棒オオオ！！！！」

「しっ侵入者だアアア！！！！排除しろオオ！！！！」

「H a ! この竜をいとも簡単に食えると思うなよ?」

「なあアア! ? どっ独眼竜ウウ! !」

「相棒を返せえエエエ! ! ! ! !」とそして「相棒何処だアアア! ! !」

ライカ心の中で・・・

伊達の兄様に夏美（相棒）! ?

するとライカはテレパシーで夏美に居場所を伝えそして・・・。  
ドアをけり上げる音がした。

すると其処には雷月を持った夏美がいて「・・・よオ。邪魔するよ? 石田三成。」と同時にライカを見てフツと笑い「待たせたな? 相棒? 迎えに来たぜ?」



ライカはそれを見てフツと笑い「相棒。」と同時に石田の部下達をやり終えた政宗も入って来て

「Hey! snow girl Are you ok?」とニヤリと笑ってみていた。

ライカ驚いて「伊達の兄様!!」と同時に夏美を見て深紅の眼に変わった事を見て・・・

吸血鬼化した事を悟った。

するとライカは夏美を見てフツと笑い「その様子だとなったんだな?」

夏美もタバコに火を灯し「・・・あア。」と同時に「軽蔑、するか?」と苦笑い。

ライカ首を横に振り「いいや・・・しねえさ。」「そう言い夏美の所に戻ろうとした次の瞬間ライカの首に刀が突き付けられた。

三成が逃がさないように刀を突き付けていたのだ。

ライカと夏美はそれを見て軽く舌打ちしていた。

と同時に背後から三成を攻撃する者がいた。

だが・・・其れを察知したのか三成は後ろの者を潔く斬り付けた。

そしてその場にかわしつつもその者は崩れ落ちそうになる。

三成はフツと笑い「・・・この私の背後をやすやすとれると思うのか？　甘い奴だ。」

すると夏美は三成の背後を見て驚き「みっ！美零ッ！！！」

そう三成を攻撃したのは何と夏美の側近である狭川美零だった。

美零苦笑いをし「お、お許しください。夏美様。この美零少々ライカの出に時間稼ごうと・・・。」

そう言いその場に崩れ落ちた。

夏美はそれを見て「美零イイイイイ!!!!!!!!!!」と叫び

そして「石田三成イイイイ！！！！！！！！！！！」と雷月を鞘から取り出し突進して行った。

流石の政宗も其れを見て「wait! 夏美!!!」と止めようとした、だが………今の夏美は聞く耳を持っていないかったいや持てなかった。、と言った方が正しいのかもしれない。

チイクしょう!!!! 私しゃアはまた、護れないのか、!? 大切なものを（相棒）!!!!

と同時に「石田三成ィィ!!!! てめエはゆるさねェ!!!!!! 唸れ!! 我が雷よ!!!! 轟け!!!! ら・・・」と

雷神と言おうとした次の瞬間ドクン!!!! と心音がした。

んな!?! 何故だ!?!

すると三成が夏美の所に寄って来てニヤリと笑い「・・・フン。その様子だとうやら、まだ人間の（ヒト）生の血、飲んでないようだな。」

その事を聞いたライカは驚いた。

そう、政宗は此れを予想して心配して夏美を止めたのだ。

人間から吸血鬼化したものは基本的にはまだ体が対応しきれていない為血を飲まないと戦の時に對して不利が生まれるのだ。

夏美体を起こしながらも「じゃあかしい!!」どんなに飢えていても今は吸う気になれねエ。」そう言い錠剤を懷から取り出し大量に飲み始めて再度雷月を構え直し「今度こそくらわせてやるぜ!!」雷神ッ!!」そう言い技を放った。

だが、三成に軽くかわされてしまい背後を取られ「・・・甘いぞ?」そう言い背中を斬りつけられそうになったが夏美も軽くかわして着地する。

しかし、少々斬られた為血が滴れた。

三成はそれを見て只ニヤリと笑っていた。

第15夜。夏美吸血鬼化してからの初仕事。相棒救出?完。

## 第15夜。夏美吸血鬼化してからの初仕事。相棒救出？（後書き）

有難うございます。有難うございます。有難うございます。

今章も御付き合い頂いて有難うございます。

無事に更新完了致しました。

其れではほぼ毎回？ですがグタグタ予告をどうぞ笑

アレから相棒ライカを救うため三成がいると思われる洋館に行った政宗と夏美。そして・・特殊ダムピールの龍王崎家の娘である茜も一足早く三成の洋館に出向きライカを救出しようと試みたが何と、知らぬ間に三成に見つかってしまいそしてライカを手放さないようにと・・足止めをくらい尚且つ逃がそうとして三成に攻撃を仕掛けた夏美の側近の美零が三成に不意打ちを食らい重傷を負ってしまう。その様子を見た夏美が怒りに身を任せてしまい三成に攻撃しようとしたが、再び血に飢える発作に見舞われてしまう。

果たして・・・・。

第16夜。美零負傷で三成夏美の怒りを買う？三成VS夏美。そして・・。

以上です。有難うございます

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

**第16夜。美零負傷で三成夏美の怒りを買う？三成VS夏美。そして・・・**

**(前**

今章も御付き合います。有難うございます。

前章と似た様な感じです。

長丁場の残酷シーン編集可能性等あり予定です。その辺は御了承のほど宜しくお願い致します。

再び。



## 第16夜。美零負傷で三成夏美の怒りを買う？三成VS夏美。そして・・・

アレから相棒ライカを救うため三成がいると思われる洋館に行った政宗と夏美。そして・・・特殊ダムピールの龍王崎家の娘である茜も一足早く三成の洋館に出向きライカを救出しようと試みたが何と、知らぬ間に三成に見つかってしまいそしてライカを手放さないようにと・・・足止めをくらい、

尚且つ逃がそうとして三成に攻撃を仕掛けた夏美の側近の美零が三成に不意打ちを食らい重傷を負ってしまう。

その様子を見た夏美が怒りに身を任せてしまい三成に攻撃しようとしたが、再び血に飢える発作に見舞われてしまった。その後発作に襲われつつも夏美自身は雷月を使い三成と戦おうとした。

そして、政宗に「・・・政宗様。おごまかしいようで申し訳ないですが、頼み事が・・・。」

政宗はフツと見て「OK。言ってみな？」

夏美は再度政宗を見て「・・・相棒達をそして美零を連れて先に出て下さい。巻き込んでしまうとあれですから。其れに、美零の傷を早く治さなければと・・・。」

その事を聞いた政宗は夏美を見て「・・・お前一人でやるつもりか？、」と尋ねた。

夏美はそれを聞いてフツと笑い「・・・あいつは人間<sup>ヒト</sup>です。’、’一刻も早く手当てしなければ危険ですから・・・。」と呟いた。

其れを聞いた政宗は軽くため息をつき苦笑いして「・・・All right。だが、あまり無茶するんじゃないぜ？」そう言いライカ達を連れて脱出した。

夏美はそれを見て軽いため息をつき「さてと・・・再始動」と行こうじゃないかい？石田三成。」と三成を睨みつけながら言った。

そして再度再び雷月に雷をまとわせて「今度こそ喰らえ！！再大力雷神！！！！！！」そう言い三成に向かって喰らわせた。

だが・・・三成は、無傷、だった。

夏美は両目を見開きじょつ冗談だろ！？

すると三成はいきなり夏美の背後にまわり後ろから動きを取れなくした。と同時に夏美自身を自身の前に向けさせた。

夏美「しま・・・」

クソッ！動かねェ！！

其れと同時に夏美の口元を三成がふさいだ。

其れと同時に血が口の中に入って来ていた。

夏美「・・・！！」

そう三成がいつの間にか自分の手を切って血を流して夏美の口元へと持って行っていたのだ。

そして三成は夏美の耳元で「あア、’ 1つ言い忘れていた私には雷もそして・・・炎も効かん。後銀の銃弾もだ。’, 他の吸血鬼とは違い少々特殊だな。’, 貴様の’ 属性では倒せんよ。’, 」そして「’ さア・・・このまま本能のままに私の血を飲み続けるが良い。’, 」と囁いた。

夏美は一瞬、血の甘い香りに酔ってしまい三成の血を体に受けてい

ようとしていた。  
,

すると・・・。

「夏美ッ!!!!!!」  
—

と心の中で高杉の声が聞こえた。

・・・晋助様？

「戻って来い!!!!夏美!!!!」  
—

戻りたい。

ケド・・・。

モドレナイ。

―夏美ッ！！！！戻れッ！！！！―

―その男の血を受け入れるな！！！！―

そしてオウガの声が夏美の頭にこだました。

すると夏美は一瞬我に戻りギンガを行き成り自分の右腹脇腹うち込んだ。

と同時に三成も離れた。

夏美の右腹脇腹から血が滴れた。

三成はそれを見て「・・・ほオ。」と呟いていた。

第16夜。美零負傷で三成夏美の怒りを買う？ 三成VS夏美。そして・・・完。

第16夜。美零負傷で三成夏美の怒りを買う？三成VS夏美。そして・・・

(後)

有難うございます。有難うございます。

無事に更新完了する事が出来ました。

其れではほぼ毎回？のグタグタ予告をどうぞ(笑)

アレから三成のいる洋館で三成と対峙していて一瞬捕まり三成自身の血を体内に流されそうになった夏美。

だが、とっさにて高杉やオウガの声が頭の中でこだました。

其れと同時にギンガを懐から急いで取り出し自身の危険を顧みずそして、三成に‘効かない’と知りつつも発砲し何を逃れた。

夏美は右腹脇腹を抱えつつもフツと笑い「・・・貴方の血は受け取る訳にもいかないんでね。’私はどんなに飢えてても’敵方の血を飲む訳にも行かないんだ。’」

そして雷月を取り出して「・・・貴方には効かないってのも分かってる’

’分かってるけど・・・あいつ(美零)を傷つけられ・・・尚且つ相棒を私から奪おうとした。其れも’ずっと前(幼少)からいた

私にとっては、一番最初の相棒、'と言って良い奴を。'」「三成はそれを黙って聞いていた。

そしてギンガを懐にしまいこみそして雷月を鞘からはずし「・・・  
'もっかい勝負だ。' 石田三成。」

三成ニヤリと笑い「'よかろう'。只・・・'何度やっても同じだな。'」'そう言い刀を鞘から抜いた。

夏美「第17夜。夏美と三成第二ラウンド？」

「次章もどうぞ宜しくな。」

以上です。有難うございました。

次章もどうぞ宜しくお願い致します。



## 第17夜。夏美と三成第二ラウンド？（前書き）

有難うございます。

今章は前章と似たような内容になると思います。

残酷シーン等の編集長丁場等予定です。

## 第17夜。夏美と三成第二ラウンド？

アレから三成のいる洋館で三成と対峙していて一瞬捕まり三成自身の血を体内に流されそうになった夏美。

だが、とっさにて高杉やオウガの声が頭の中でこだました。

其れと同時にギンガを懷から急いで取り出し自身の危険を顧みずそして、三成に‘効かない’と知りつつも発砲し何を逃れた。

夏美は右腹脇腹を抱えつつもフツと笑い「・・・貴方の血は受け取る訳にもいかないんでね。’私はどんなに飢えてても’敵方の血を飲む訳にも行かないんだ。’」

そして雷月を取り出して「・・・貴方には効かないってのも分かってる’

’分かってるけど・・・’あいつ（美零）を傷つけられ・・・尚且つ相棒を私から奪おうとした。其れも’ずっと前（幼少）からいた私にとっては’一番最初の相棒’と言って良い奴を。’」三成はそれを黙って聞いていた。

そしてギンガを懷にしまいこみそして雷月を鞘からはずし「・・・’もっかい勝負だ。’石田三成。’」

三成ニヤリと笑い「よかろう。只・・・何度やっても同じだが

な。」　「そう言い刀を鞘から抜いた。

夏美もそれを聞いてフツと笑った。

‘ 何度やっても同じ・・・か。 ’

だが、 ‘ 不可能を可能にする ’ 。 此れが・・・ね。

すると同時に三成も刀を再び鞘から抜き出し夏美に斬りかかった。

夏美其れを受ける。

お互いに刀を交わる音がする。

一方、何を逃れたライカ達は遠目で夏美達の戦いを見ていた。

ライカ心配そうに傷ついた体を支え「・・・・相棒。」と呟いた。

夏美は雷月を再度三成に向けた。

そして「雷月流……雷水龍弾<sup>らいすいりゅうだん</sup>!!」と技を三成に向けて放った。

・・‘雷は伝わらないみたいだが、この技は水も入っているこれなら効くかも知れない!!’――

と一か八かにかけてみた。

‘今度こそ効いた’、と思い煙を見たら……。

夏美は再度驚き「んな?」

「効いていない。『無傷だ』。――」

そして三成は再度夏美の前に現れたかと思った次の瞬間……夏美の肩に刀をいつの間にか背後から突き刺して……抜いた。

と同時にドクン!!!! ドクン!!!!!!

心音がすごく大きくなりそして……。

「チガホシイ」

「ゲンカイダ」

「モウソロソロナマノチノマナイト……」

‘カラダガモタナイヨ’

そして夏美の体は思わずその場所に崩れ落ちていた。

と同時に肩から血が沁み渡った。

三成は鞘に刀を収めニヤリと再度笑い夏美を担いでベットに横たわらせて己の手首を咬み血を口に含み

夏美の口へと落とした。

そして・・・其処から三成の血がなだれ込み、自然と夏美の体へと流れ込んだ。

夏美はフツと口に何かが入った事に違和感覚えすぐに目が覚めた。

と同時に三成が夏美に血を与えている所を目の当たりにし思わず抵

抗してしまう。

だが・・その思いとは裏腹にどんどん三成の血が夏美の体内になだれ込んで行った。

・・どうしてだ!?!何で!?!?

そして夏美が飲み込んだと確認した三成は夏美から離れてニヤリと笑い「どうだ、生の血は美味かっただろう?、」と言った。

其れも楽しそうに・・。

夏美はそれを見てそして聞いたら思わず顔をしかめた。

そして、心の中でクソ!!!なんてこった!血イ受け入れてしまった!!!

まだ、飲まないって決めていたのに!!!!

其れとは、裏腹に血に飢えているもう一人の自分がいた。  
、

第17夜。夏美と三成第二ラウンド？完。



## 第17夜。夏美と三成第二ラウンド？（後書き）

有難うございます。無事に更新完了致しました。

遅くなって申し訳ありません。

其れではグタグタですがほぼ毎回の予告風をどうぞ笑

アレからライカを救い、政宗に託した夏美は再度三成とやり合う事になった

しかし、‘吸血鬼化して一度も‘生の血’を飲んでいない’夏美にとって

あまりにも‘不利だった’。其れを見抜いた三成は夏美自身を追いかみそして・己の血を夏美に注ぎ込んでしまい、夏美自身も其れを受け入れてしまった。

夏美は軽く舌打ちし心の中で……。

‘何でこうなるんだがな？私しゃアはまだ・・・飲まない’って決めていたのに。’

・・・晋助様。政宗様。片倉様。貴方方の血を最初に受け入れなかった私を軽蔑しますか？

と切なさそうに呟いた。

一方、政宗の手によりワカバに戻ったライカはタバコに火を灯し夏の気が若干不安定だと言う事を察知し「・・・相棒？」と心配そうに呟いた。

ライカ「第18夜。夏美ついに三成の血を受け入れる？そして・・・ライカ無事にワカバ帰還。」

「次章もどうぞ宜しくね。」

以上です。有難うございます。

**第18夜。夏美ついに三成の血を受け入れる？そして・・・ライカ無事にワカバ帰**

有難うございます。

どん更新ではありませんが此方も無事に再度更新いたしました。

遅くなりまして申し訳ありません。

今回はワカバ組がメインとなる予定です。

長丁場等編集可能性毎度ではありますが・・・成る可能せいございますのでご了承頂きたく思います。

**第18夜。夏美ついに三成の血を受け入れる？そして・・・ライカ無事にワカバ帰**

アレからライカを救い、政宗に託した夏美は再度三成とやり合う事になった

しかし、‘吸血鬼化して一度も‘生の血’を飲んでいない’夏美にとつて

あまりにも‘不利だった’。其れを見抜いた三成は夏美自身を追いかみそして・・・己の血を夏美に注ぎ込んでしまい、夏美自身も其れを受け入れてしまった。

夏美は軽く舌打ちし心の中で・・・。

‘何でこうなるんだがな？私しやアはまだ・・・飲まない’って決めていたのに。’

・・・晋助様。政宗様。片倉様。貴方方の血を最初に受け入れなかった私を軽蔑しますか？

と切なさそうに呟いた。

一方、政宗の手によりワカバに戻ったライカはタバコに火を灯し夏美の気が若干不安定だと言う事を察知し「・・・相棒？」と心配そうに呟いた。

そして窓を見て「・・・相棒大丈夫か？」とも呟いた。

すると茜がライカの目の前に現れてきた。

ライカはそれを見て「・・・さっきはすまなかった。御蔭手助かったよ。」

茜は一礼し「ご無事で何よりです。」と同時に「・・・夏美さん早くお戻りになれるといいですね。」

ライカはタバコを再度口い加え直して「・・・あア。」

一方、夏美はと言うと無理やり？石田三成に血を飲まされて再度三成に向けて翡翠刀を抜刀し始めた。

そして「石田三成イイイイイ！！今度こそ蹴りつけてやらアアアア！！！！」と叫びながら。

三成はそれを見てニヤリと笑い夏美を迎え撃った。

お互いの刃の音がする。

そして三成の刃を外して三成に向かって斬りかかろうとした次の瞬間・・・。

ピタリと手前で止まった。

夏美はそれを見て驚いて「・・・な!?!?!?」

ば、馬鹿な動かない!?!何故だ!?!?

すると三成が行き成り夏美に向かって斬り付けた。

と同時に夏美自身かわしきれなくてその場で膝をつき胸元に傷がつけられその傷を手でおう。

と同時に冷や汗が滴る。

な、何でだ！？どうして！？

三成はそれを察知したのかニヤリと笑い「・・・私の血が貴様の体内に入った時点でお前は私を攻撃できません。残念だったな？」

其れを聞いた夏美は只只おどろいていた・・・。

そして三成夏美の左ほほを手で触り耳元で「・・・さア堕ちてくるがいい私の所へ。」と囁いた。

夏美は一瞬其れに飲み込まれようとした。

だが・・・。

相棒!!!!!!!!!!!!!!

ライカの声が夏美の中に響いたのを聞いた。

夏美は意識がもうろうとしながらもライカの声が聞こえ「・・・ラ、イ、カ。」と言いついて

そうだ！！私しゃアは此処でくたばる訳にもいかねえんだ！！そう  
呟き翡翠刀を再度握り締めて近づいた三成に向けて体を少しずつ無  
理やり動かしながら・・・せめて！せめて！！この男に一太刀浴び  
せてやる！！’そう心の中で呟きながら三成の前まで行きそして・・・

ザシュッ！！！！と三成に斬りかかりそして、三成の前から血飛沫が  
舞った。

そして三成は体を少しぐらつきながらもニヤリと笑い「・・・ほう。」  
と楽しそうに呟いていた。

第18夜。夏美ついに三成の血を受け入れる？そして・・・ライカ無  
事にワカバ帰還。完。



**第18夜。夏美ついに三成の血を受け入れる？そして・・・ライカ無事にワカバ帰**

有難うございます。無事に更新完了致しました。

遅くなりまして申し訳ないです!!

其れではほぼ毎回のグタグタ？予告風をどうぞ。

三成は夏美を見ていた。

と同時に夏美自身も翡翠刀を床に突き刺し三成を見ていた。

其れも息切れをしながら・・・。

一方、三成はとても楽しそうに傷つけられた所を手で触り見ていた。

夏美を見て再度ニヤリと笑い小声で「・・・欲しいな。」と呟きながらも

「・・・どうした？もう終わりか？」と夏美を挑発する。

夏美は軽く舌打ちして息を整えていた。

クソ!! 息がまだ・・・焦りながら落ち着け私しゃア。此処で、の  
ったら奴の思うつぼだ!!」

と自身に言い聞かせていた。

三成「第19夜。三成VS夏美再度対戦？そして再度夏美に迫る三成の手。」

「次章も宜しくな。」

以上です。有難うございます。

**第19夜。三成VS夏美再度対戦？そして再度夏美に迫る三成の手。（前書き）**

お久しぶりです。此方は有難うございます。

前回の続きみたいなものです。

ほぼ毎回で申し訳ないですが編集可能性尚且つ残酷シーン等あり予定ですのでご了承とご理解を宜しくお願い致します。

## 第19夜。三成VS夏美再度対戦？そして再度夏美に迫る三成の手。

三成は夏美を見ていた。

と同時に夏美自身も翡翠刀を床に突き刺し三成を見ていた。

其れも息切れをしながら・・・。

一方、三成はとても楽しそうに傷つけられた所を手で触り見ていた。

夏美を見て再度ニヤリと笑い小声で「・・・欲しいな。」と呟きながらも

「・・・どうした？もう終わりか？」と夏美を挑発する。

夏美は軽く舌打ちして息を整えていた。

クソ！！息がまだ・・・。焦りながら落ち着け私しゃア。此処で、の  
ったら奴の思うつぼだ！！、

と自身に言い聞かせていた。

三成はそれを見てフンと笑い「・・・強情な奴だ。貴様も・・・奴<sup>ライカ</sup>も。」と呟きながら

再度夏美の所に近づいて行った。

夏美はそれを聞いてニヤリと笑い替えて「・・・そりゃあもうさ。性格上が似てるから馴染みどうしなもんでね。」何か似ている風なんだよ。」と同時に夏美再度翡翠刀を鞘から取り出して三成の前に刃を向けまた威嚇した。

三成は再度またフンと笑い「・・・まだか？だが。」と同時に「・・・刀を納めろ。」と再度耳元で囁いた。

そして夏美は知らぬ間に、言う事を聞いていた。

いつの間にか翡翠刀を鞘に納めていた。

三成はそれを確認し満足そうに笑いそして夏美を自身の所に今度は呼び寄せた。

夏美自身は、何故？、と言う顔をいしていた。

何でどうして？？？？

三成は其れとは裏腹に自身の首筋を出して夏美の耳元で「・・・、  
限界だろ？飲め。貴様に拒否権はない。」と囁いた。

と同時に夏美自身もいつの間にか、自身の牙を三成の首筋に立て飲み始めてしまった。

三成は夏美のその様子を見て満足に笑っていた。

そして夏美はまるでその場に崩れるかのようにいつの間にか三成の腕の中に入って行った。

三成はそれを見てとても満足そうに夏美の頭なでて自身のベットへと寝かせていた。

一方、此処は再度ワカバ。

ライカを初めセラス達は、勘付いていた。夏美の変化を……。、

ライカタバコを吸いながら「・・・相棒。、」

「戻って来いよ!!! いつでも待っているからさ!!!! なア・・・相棒!!!」

セラスも小声で「・・・あの様子だと多分夏美さん石田三成の血を飲んでしまいましたね。、」

その事が聞こえたのかライカと沙代子は驚きの顔をしていた。

ライカは軽く舌打ちし「・・・マジかよ。、 だけど、正直あの男ヒトの血は飲んでほしくなかったな。」

セラスと沙代子は何故? という顔をしていた。

ライカはタバコの煙を潜らせて「・・・あの男<sup>ヒト</sup>の血はな他の吸血鬼達とは違い拘束力はかなり高いみたいなんだ。」例え、伊達の兄様達の血があいつの体内に入っても・・・其れを上回ってしまうのさ。理由は・・・分らんがな。」と顔しかめて言った。

セラスはそれを聞き「じゃ・・・夏美さんは。」

ライカはタバコを再度口に加え直して「・・・あの男<sup>ヒト</sup>には刃向う事が出来ないって事さ。」悔しいがな。」

沙代子はそれを聞いて・・・あらゝとしていた。

第19夜。三成VS夏美再度対戦？そして再度夏美に迫る三成の手。  
完。



第19夜。三成VS夏美再度対戦？そして再度夏美に迫る三成の手。（後書き）

ご覧頂きまして有難うございます。

また大分遅くなりましたが無事に更新完了致しました。

ほぼ毎回？ですがグダグダ予告風をどうぞ。

此処は三成のいる洋館。

アレから夏美と対峙して、自身の血を夏美に入れて自身の部屋に夏美を寝かせていた、

ベットに寝かせている夏美の頬をそつと手で触りながらフツと笑いながら

夏美を見て「・・・やっ」と手に入れた。」「もう逃がさんぞ？」「いや・・・

逃げられないと思え？」「夏美。」「と愛おしそうに呼んでいた。

すると、みこしに乗った男が入って来た。

「三成よ。」

その声を聞いた三成は後ろを向いて「・・・刑部か。」

大谷吉継通称刑部。三成の友人の男だ。

刑部は夏美をチラッと見て「・・・そ奴がそうか?」

三成は夏美をチラッと見てフツと笑い「・・・あア。」

「橘大樹と楓の忘れ形見だ。」

刑部は眼を細めて「ほう。」と呟いた。

と同時に「三成よ。すまぬが話がある少々来てくれまいか?」

三成は頷き「分かった。」と言い刑部と共に部屋を出た。

と同時に夏美が目を覚ました。

そして鏡を見て目を疑った。

「こ、こいつは・・・まさか!」

石田三成と同じグレーの瞳色!?

そして顔を手で覆いながら「・・・クソ!」そして「・・・ライカッ!」と大事な相棒の名を呼んだ。

と同時にライカの声が夏美の中に響き渡った。

ライカ「第20夜。三成の血を飲んだ後の夏美そして・・・。」

「次章もどうぞ宜しくな！」

以上です。有難うございました。

**第20夜。三成の血を飲んだ後の夏美そして・・・（前書き）**

お久しぶりです。

再度ご観覧頂きありがとうございます。

今章は前章の続きみたいなものです。

大谷さんが出てきます。尚此処の大谷さんも吸血鬼設定です。

最後辺りに夏美自身を心配した。ライカが登場予定です。

長丁場の編集可能性等あり予定です。毎度のことながらご了承下さい。

## 第20夜。三成の血を飲んだ後の夏美そして・・・。

此処は三成のいる洋館。

アレから夏美と対峙して、自身の血を夏美に入れて自身の部屋に夏美を寝かせていた、

ベットに寝かせている夏美の頬をそつと手で触りながらフツと笑いながら

夏美を見て「・・・、やっと手に入れた、もう逃がさんぞ?、いや・・・

、逃げられないと思え?、夏美、」と愛おしそうに呼んでいた。すると、みこしに乗った男が入って来た。

「三成よ。」

その声を聞いた三成は後ろを向いて「・・・刑部か。」

大谷吉継通称刑部。三成の友人の男だ。

刑部は夏美をチラッと見て「・・・そ奴がそうか?、」

三成は夏美をチラッと見てフツと笑い「・・・あア、」と続け様に

「橘大樹と楓の忘れ形見だ。」

刑部は眼を細めて「ほう。」と呟いた。

と同時に「三成よ。すまぬが話がある少々来てくれまいか？」

三成は頷き「分かった。」と言い刑部と共に部屋を出た。

と同時に夏美が目を覚ました。

そして鏡を見て目を疑った。

「こ、こいつは……。まさか!!」

石田三成と同じグレーの瞳色!?

そして顔を手で覆いながら「・・・クソ!!」そして「・・・ライカッ!!」と大事な相棒の名を呼んだ。

と同時にライカの声が夏美の中に響き渡った。

夏美は悔しそうに「・・・何だよッ！！どうしてだよッ！！！クソがッ！！！」

其れと同時に、自身の中でパリンと音がして、嘗て三成自身が自分を大事に側に置いているのも思い出す。

・・・そうか。‘思い出した。’私しやア昔あの男の側にもいたんだ。

・・・三成兄さま。

だけど、私は・・・‘側に入れない！！’ワカバに戻らなきゃ！！！！！！

そして三成がいない事を確認して窓から逃走した。

一方、刑部と話していた三成は、夏美が逃亡した事を感じ、軽く舌打ちした。

刑部は三成を見て「・・・あ奴逃げおったか。」と聞き三成も「あア。逃げた。」

と同時に刑部は「やれ・・・三成よ。行くがいい。まだ、遠くに行っていないはずだ。」

三成はそれを聞いて「・・・感謝する。」そう言いその場を去って夏美を追った。

刑部は窓から月を見て「・・・すべては義の為。ぬしの為。」

一方、夏美は黒い洋館から逃げ続けていた。

すると、一台の黒い車が止まって「相棒ッ！！！」とライカの声がした。

夏美はそれを聞いて「相棒ッ！！！！来てくれていたのか！？」そ



う言い黒い車に急いで近づいていた。

ライカは頷き「とりあえず話は後だ!! 乗れッ!!!!」

夏美は頷き乗った。そしてドアを閉めてその場から潔く離れた。

と同時に運転席を見たらウォルターだった。

ウォルターは夏美を見て頬笑み「お疲れ様でございました。夏美嬢。」

夏美も苦笑いして「すみません。ご迷惑おかけしました。」

ウォルターはそれを聞いて「いいえ。とんでもございません。」と微笑み返して言った。

そして、ライカはタバコに火を灯し「・・・相棒。」

夏美はライカを見て「どっした？」

ライカはタバコを吸いながら「・・・こんな時にアレなんだが、高杉様がお見えになられてる。」

夏美はそれを聞いて頭を抱えて「・・・御機嫌斜め？」ひよつとして・・・。」

ライカはフツと笑い「安心しな。今の所は平気だよ。」

夏美はそれを聞いてホッと安心したのかタメ息をついた。

そして、ライカ達を乗せた車はワカバのアジトへと向かって行った。

三成が見ているとも知らずに・・・。

第20夜。三成の血を飲んだ後の夏美そして・・・完。

**第20夜。三成の血を飲んだ後の夏美そして・・・（後書き）**

有難うございます。

今章は、短期間でできたと思います。

其れではほぼ？毎回のグタグタ予告風をどうぞ。

アレから無事にワカバに帰還した夏美。

オウガは夏美の姿を見て安堵し「・・・よく無事に帰って来てくれた。  
夏美。

心配したぞ。」

夏美オウガに向けて深部下一礼し「・・・この度は大変にご迷惑そ  
してご心配をおかけ致しました。兄様。」と謝罪した。

と同時に高杉を見て「・・・どうしたの？晋助様？」

高杉はタバコに火を灯して「・・・夏美頼みがある。俺達の管轄内  
にどうやらグールが出たらしいんだ。グール討伐は基本的に俺達に  
権限はねえ。

だから、お前エ達に頼みてェんだが・・・いいか？」

そしてたまたまいたインテグラに顔向けてインテグラ頷き「行って

来い。」

夏美は頷きそしてライカを見て「了解っと！」

その様子を見た高杉は「ありがとよ。」と礼を行った。

そしてオウガに、疲れただろ？今は休めと言った。

夏美達は一礼しオウガの部屋を後にした。

ライカと夏美は各自の部屋へと行った。

だが、夏美は部屋に入ろうとはせずにドアの前で立ち止まった。

・・・まさかな。’と心の中で呟きながら。

ライカ「第21夜。夏美無事にワカバに帰還・・・そしてワカバ、ヘルシング

再始動？」

「次章もどうぞ宜しくね。」

以上です。有難うございます。

**第21夜。夏美無事にワカバに帰還・・・そしてワカバ、ヘルシングダ再再始動？**

有難うございます。

今章は主に多分ヘルシングとワカバの事に関しての予定です。

尚、此方もほぼ毎回ですが長丁場等編集可能性あり予定ですのをご  
了承下さい。

## 第21夜。夏美無事にワカバに帰還・・・そしてワカバ、ヘルシング再再始動？

アレから無事にワカバに帰還した夏美。

オウガは夏美の姿を見て安堵し「・・・よく無事に帰って来てくれた。夏美。」

心配したぞ。」

夏美オウガに向けて深部下一礼し「・・・この度は大変にご迷惑そしてご心配をおかけ致しました。兄様。」と謝罪した。

と同時に高杉を見て「・・・どうしたの？晋助様？」

高杉はタバコに火を灯して「・・・夏美頼みがある。俺達の管轄内にどうやらグールが出たらしいん

だ。グール討伐は基本的に俺達に権限はねえ。だから、お前エ達に頼みてェんだが・・・いいか？」

そしてたまたまいたインテグラに顔向けてインテグラ頷き「行って来い。」

夏美は頷きそしてライカを見て「了解っと！」

その様子を見た高杉は「ありがとよ。」と礼を言った。

そしてオウガに、疲れただろ？今は休めと言った。

夏美達は一礼しオウガの部屋を後にした。

ライカと夏美は各自の部屋へと行った。

だが、夏美は部屋に入ろうとはせずにドアの前で立ち止まった。

・・・‘まさかな。’と心の中で呟きながら。

・・・‘私の中にあるあの男（三成兄さま）の血がまたざわついて  
いる。’

もしかして、もう・・・‘追いつかれた？’

だとしたら、早いな。

すると、ドアがいきなり開けられ夏美の腕を行き成り捕まれ中にグ  
イッと入れられた。



夏美はしまったと言う顔をしたが時すでに遅しすっかりその腕の主の中にいた。

「・・・捕まえたぞ。夏美。もう逃げられんと思え?」

夏美はその声を聞くと体がビクっとなり顔を上に向けた。

其処には先程まいたはずの三成がいた。

三成はニヤリと笑い夏美の首筋に顔近づけて「・・・御仕置きしないとな。」と言い牙を立てた。

夏美は驚きながらも顔しかめた。

夏美の血が三成の体の中に入る。

と同時に夏美自身にも快樂が巡って来た、そして三成は満足したかのように夏美自身の首筋から牙を抜いた。

そして、夏美自身は再度三成の腕の中に倒れ込んだ。

と同時に、三成は今度は自身の腕を咬み血を出した。

夏美の口の所へと持っていく。

夏美は意識もうろうとしながらも、三成の腕をつかみ口をあて飲み始めた。

三成はフツと笑い夏美の頭をいとおしそうに撫でていた。

一方、高杉は、その事を勘付いたのか軽く舌打ちして、小声で・・・。

「・・・石田の野郎。来ていたのか。」やってくれるぜ。」そう  
呟いていた。

その事をアーカード達もなんとなくだが気づいていた。

一方、此処は再度夏美の部屋。

三成は夏美から自身の腕をそろそろ外そうとしながら「・・・夏美。  
‘そろそろ終わりだ。’」と言った。

夏美自身も三成の腕から口を外してソファーに身を沈ませながらタバコに火を灯す。

そして、三成自身も夏美の側に座った。

夏美自身はアレからタバコを吸いながら黙り続けていた。

三成はそんな夏美を自身の膝に抱き寄せ座らせた。

夏美驚いて思わずタバコを落そうとしたが幸いにもフィルター部分を取ったので大事に至らなかった。

テーブルにある灰皿に火をもみ消した。

夏美苦笑いして「・・・私しゃアはもう、そんな年じゃないよ？、  
‘三成兄さま、’と知らぬ間にいつの間にか三成に身をコテンと預けていた。

三成はそれを聞いてフンと笑い「・・・貴様は、私から見ればあの頃とちっとも変らん。、」

夏美はそれを聞いて再度苦笑いして「・・・ひどいな。、’思い出した途端そうそうの一言が其れ？、’」と言り返した。

すると三成は夏美の頭を撫で始めた。

夏美は一瞬驚くのも、とてつもない懐かしさを感じ始めた。

あア・・そういやア昔、まだ人間<sup>ヒト</sup>だった頃三成兄さまにもこうして頭なでられていたんだっけ。

懐かしいな。

すると、三成は夏美の髪を撫で始めながら「・・・、私と共に来い。夏美。」

その事を聞いた夏美は只三成の胸の中に黙っていた。

・・・、共に行きたい自分と、橘とワカバの宿命<sup>サダメ</sup>を果たさないといけないと言う自分がいる、

黙っている夏美を見て三成はニヤリと笑い「・・・、言っておくが拒否は認めん。」

その事を聞いた夏美はまるで困ったように苦笑いをしていた。

でも、私しやアはワカバの宿命サダメをこれからも背負って行きたいし、  
兄様達ともにいたい。

だけど、三成兄さまの側にも……。そう両方願うのはダメかしらね。

と心の中で呟いていた。

あア……。良く分からないや。

‘ 闇が拘束する。冷静でいられなくなる……。三成の兄さまも大事、だけど今も大事。 ’

三成は夏美を強く抱きしめて「……………行くな!! もう二度と私の元から去るな!!!!!!!!!!」

其れを聞いた夏美は只再度黙りつづけてそして「貴様は私の側にいればいい!!!!!!!!!!あの時の様に!!」

離れる事を拒否する!!!!!!!!!!!!!!

夏美はそれを聞いてようやく口を開き「・・・参ったね。弱ったね。」と小声で呟いた。

三成はそれを聞いて「貴様はもはや人間<sup>ヒト</sup>ではない。私達と同じ吸血鬼<sup>モノ</sup>なのだ。」

夏美はそれを聞いて再度黙ってしまった。

三成は続け様にフツと笑い「・・・貴様には私だければいい。私もそうだ・・・。」

そう言いながら夏美の頭を撫でつづける。

と同時に衝撃音がした。

夏美は慌てて第三の目で確認する。

と同時にワカバの末端が夏美の部屋に慌てて入って来て夏美を見て  
「な、夏美の姉さん！大変っス！！！！！」

夏美は慌てて「どうした！？」

末端は「こ、広州の襲撃です！！そして、いつの間にか夕紀音の姉  
さんが、謀反を！！！！」

夏美はそれを聞いて両目を見開き「・・・う、嘘だろ！？夕紀音の奴  
が！？、謀反を！？、」

夏美はその場に崩れ落ちた。あいざきかわゆきね藍崎河夕紀音夏美が妹の様に可愛がり  
そしてオウガの左腕を務めた女だ。

そして末端に「・・・あいつなら、任せられると思ったのにな。  
、」とかなしく呟きながら「仕方ねェ！！おこっちまったもんはし  
ようがねェ！！！！」



そして翡翠刀を握り締めて「・・・落し前はちゃんとつけないかならねえな・・・。」と同時に悔しそうな顔してギリッと歯を食いしばり「・・・其れにしても何であいつが!!!!!!!!!!」

だけど、なってしまったものは仕方ないと言う顔をしていた。

そして「・・・行かないやな。」と寂しそうに呟きながら翡翠刀を持ちドアの所へと歩いて行った。

だが、三成がそれを許さなかった。夏美自身を再度抱き寄せたのだ。

夏美は悲しげな表情<sup>かお</sup>浮かべつつも三成に「・・・お願いだから行かせてよ。三成兄さま。」

三成はそれを拒否するかのように夏美を再度強く抱きしめた。

そして夏美の肩に顔を当て「・・・行くな。もう頼むから私を置いて行かないでくれ・・・。夏美貴様まで私を置いて行くのか？もうこれ以上の空爆は欲しくない。」とすりあてる。

夏美はそれを聞いて「色々と三成にあった事を察した。」けど「・・・ごめん。三成兄さま。こいつは蹴りだ。私の過去の鎖の蹴りを・・・。」

もうそろそろつけなきゃならない・・・。「過去の私といまの私の為にも・・・。」

夏美意を決して「・・・ごめん！やっぱり行かせて！！！！」そして三成の腕から離れて走り去る。

三成はそれを見て「行くな！！！！私の下から去るなアアアアアアアア！！！！！！！！！！」と夏美に向かってそして続け様に「此れ以上失いたくはない！！！！！！！！！！」だから・・・だから戻れエエエエ！！！！夏美イイイイイ！！！！」

夏美は三成の心感じつつも走り続けた。

そして1人の長い黒髪そして全身蒼ずくめに身を包んでいた女を発見してこう叫んだ。

「夕紀音！！！！！！！」

夕紀音と呼ばれた女はその声を聞き後ろにゆっくりと振り向きながら「・・・久しいですね。夏姉さん。」と夏美を見て言った。

第21夜。夏美無事にワカバに帰還・・・そしてワカバ、ヘルシング  
再再始動？完。

## 第21夜。夏美無事にワカバに帰還・・・そしてワカバ、ヘルシンググ再再始動？

有難うございます。

無事に更新完了致しました。

其れではグタグタ予告風をどうぞ。

夏美は切なさそうに妹分である夕紀音を見ていた。

そして「・・・何で、お前が・・・『謀反を？？』」と切なさそうに言った。

夕紀音はそれを聞き只無言のまま只困ったように笑うだけだった。

夏美「第22夜。夏美の妹分がワカバ謀反！？そして・・・」

「次章もどうぞ宜しくね。」

以上です。有難うございます。

**第22夜。夏美の妹分がワカバ謀反！？そして・・・（前書き）**

有難うございます。久々の更新となります。

今章は主に夏美と妹分を中心として書かせて頂こうと思います。

此方も編集、残酷シーン等あり予定です御了承下さい。

## 第22夜。夏美の妹分がワカバ謀反！？そして・・・

夏美は切なさそうに妹分である夕紀音を見ていた。

そして「・・・何で、お前が・・・『謀反を？？』」と切なさそうに言った。

夕紀音はそれを聞き只無言のまま只困ったように笑うだけだった。

夏美はそれを聞いてタメ息をつきながら再度タバコに火を灯した。

そして煙を吸いながら「・・・『もう一度聞くよ？信じたくないけど何で謀反を？？？』」

と再度夕紀音に問いかけた。

夕紀音は相も変わらず黙ったままだった。

夏美はタバコを再度口に加え直して「・・・まだ黙秘かい？弱ったね。」と苦笑いをしていた。

一方、三成はアレから夏美を追いかけていた。

もう頼むから消えてくれるな！！！！！！！！！！夏美！！！！！！！！！！

そして、三成は夏美の所に着いた。

と同時に夕紀音は懐から銀の銃弾入り拳銃をいつの間にか取り出していた。

夏美はそれを見て「・・・其れがお前さんの答えかい。」軽く舌打ちして翡翠刀を鞘から抜いた。

夕紀音はそれを見て悲しそうに「・・・ごめんね？夏姉さん。私・・・広州に恩があるの。だから・・・。」

夏美はそれを聞いて虫唾が走るかおしながらも「・・・そうかい。皮肉な話だね、嘗て私しやアの姉貴分だった女の組織に両親を恋人や嘗ての相棒達を奪われたのがお前さんの恩人なのかい。」

夕紀音はそれを聞いて只頷いていた。

夏美はただそれを黙ってうなずいて聞いていた「・・・なら、やるしかなさそうだ。本来なら、お前さんとはやり合くはなかったんだが、すまんね・・・ワカバの為だ。私自身の為だ。許せ。妹よ。」

そう言いながら夕紀音に突進していった。



三成はそれを聞いて胸の中で激しい怒りを覚えていた。

「広州が夏美を・・・変えてしまったのか！？私から奪ったのか！？許さない！！！！許さない！！！！」

と同時に高杉がいつの間にか来て「・・・石田さんよ。」

三成は高杉がいつの間にか来ていたのを驚きつつも「・・・何用だ。高杉。」

と問いかけた。

高杉は切なさそうに「・・・頼むから、夏美あいつの邪魔してくれるなや。」と言った。

と同時に三成はそれを聞いて「何故だ！？何故止めるッ！？広州（奴ら）は夏美を！！！！」

高杉はタバコに火を灯して「・・・だからこそだ。だから夏美<sup>あいつ</sup>自身  
が今度こそ蹴りをつけなきゃならねエ。」今度こそだ・・・。」

と同時に三成の友である刑部事大谷吉継が来て「・・・三成よ。こ奴  
の言い分も一理ある。あ奴の好きにさせてやれ。」

三成はそれを聞いて「・・・貴様が言うならそうしよう。」と続  
け様に「だが、刑部！！もしあいつの身に何かあれば貴様の止めて  
も行くぞ！！！」

刑部はそれを聞いて「あい、わかった。其れはぬしの好きにせい。」  
と言った。

そして三人は夕紀音と夏美の戦いを見ていた。

夕紀音は銀の銃弾が入った銃を夏美に向け発砲した。

夏美は、三成の血が入っているせいか・・・刹那（瞬間移動）で銃弾をかわしていた。

・・・夕紀音。私しゃアは、お前さんの事好きだったんだがな。

夕紀音はそれを見て驚いた。

「こんなにも速く動けるなんて！！夏姉さん貴女は・・・」

と同時に夏美は翡翠刀を構えながら「翡翠流・・・爆風烈風弾！！」と技を夕紀音に喰らわせた。

そして、夕紀音の体が空を舞いそして壁に激突した。

と同時にさりげなく夏美の左腕から血飛沫が舞った。

三成は両目を見開いた。

夕紀音のサポートをしにいつの間にか蒼髪で蒼黒のチャイナ服を着た女が夏美に向けて銃弾を放っていたのだ。

これは、特殊銀銃弾、普通の銀の銃弾とは違う。

三成には此れも効かないが、吸血鬼化したものに特に慣れ始めの者には大きな痛手になる。

夏美は軽く舌打ちし左腕の傷口を舐めた。

そして「・・・まさかお前さんがいるとは思ってもみなかったな。チェイリン！！！！」

チェイリン、夏美達の両親である大樹と楓を奪ったチェンランの妹。

広州の崇拝者。

チェイリンクスと笑いながら「お久しぶりです。夏美。あの時以来ですわね。」

夏美はその事を聞いて顔をしかめた。

チェイリンは続け様に「我が姉・チェンランが貴女達のご両親を奪った時ですわね。」

すると行き成り何者かがチェイリンに斬りかかって来た。

夏美はその者を見ると「茜！！お前ッ何で！？」

栖原茜。（さいばらあかね）人間の頃だった夏美にある時路頭に迷いこんで拾われそしてワカバに入りワカバのやり方に感銘を受けすっかり酔いしれている。いわばワカバの崇拝者であり・・・後から分かる事だが一度は、幼少の頃橘家本家に来て大樹と楓に世話になった経験あり。

茜は怒りに燃えつつも「・・・アンタが、そしてアンタの姉が、大樹様方を・・・・・・・・。」そして愛刀である氷月に手をやり「・・・大樹様、楓様・・・貴方様方の仇たるあの者とそして・・・あの者の妹であるこの者を・・・・・・・・。壊滅するご許可をオオオオオオオ！！！！！！」と突進していった。

夏美はその光景を見て苦笑いし「・・・あゝあんな状態になった茜は止められんな。」と同時に左腕に焼けつく痛みが走った。

と同時に相棒であるライカが来て「・・・！！相棒ッ！！」と慌てて夏美の所に駆け寄り「大丈夫か！？」

と同時に夏美もその声を聞きニッと笑い返した。

だがライカは夏美の左腕が激しく焼けているのに気づき「・・・！  
急いで救急箱持ってくるな！！」

夏美は冗談交じりで「・・・今の私しやアには必要ねえけどな。」  
と言った。

ライカはそれを聞いて「・・・例え人間<sup>アレ</sup>から変わっても手当て位  
させてくれよ。」相棒。」と

切なさそうに笑った。

夏美はフツと笑いながら「・・・すまねえ相棒。頼めるか？」

ライカは頷いた。

と同時に拳銃と刀が交わる音がする。

茜は怒りに身をまかせながら「アンタ達広州は・・夏美様を悲しませたッ！！夏美様やあの方から大事なものを奪い続けてきたのだ！！！！夏美様方に詫びを入れろオオオオオ！！！！！！そして・・」

「私に素直に壊滅されろオオオオオオオオオオオ！！！！！」

「と同時に」氷月桜「！！！！！」

と氷月を円を描きながら氷を作り桜の花びらを舞わせてチェイリンに喰らわせた。

「大樹様方に許しを乞えエエエイ！！」

一方、夏美はその場にいつの間にかしやがみこんでいた額には大粒の汗がいつの間にか滴れていた。

怪我した所が左腕であつても単なる怪我ではなくむしろ特殊銀の銃弾にやられたので体力の消耗がかなり激しかったのだ。



夏美は意識もうろうとしながらも用意してあった血液錠剤タブレットを大量に飲み始めた。

と同時に回復龍王波を使いたいが・其れも他に移る可能性がある  
ので迂闊に出来なかった。

すると、高杉が三成より先に夏美の所に来ていた。

夏美は感じたのかゆっくりと高杉の所に眼をやった。

夏美はその様子を確認すると「・・・晋助様？」

高杉は夏美の前にしゃがんで頭を撫でて「・・・ああ。俺だ。」と呟  
いていた。

そして、夏美は苦笑いしながらも「・・・何故何だろうね？何でこ  
うも大切なものが手のひらからこぼれ落ちるんだろうね？」とぼ

そつと寂しそうに言った。

高杉はその様子を見たら切なさそうな表情をして夏美をそつと抱きしめていた。

一方、三成はその様子を怒りに満ちた顔で両手のこぶしを握り締めて見続けていた。

第22夜。夏美の妹分がワカバ謀反！？そして……。完。

## 第22夜。夏美の妹分がワカバ謀反！？そして・・・（後書き）

有難うございます。無事に更新完了いたしました。

其れでは、ほぼ恒例のグタグタ予告風をどうぞ。

アレからのワカバそして夏美に来た夕紀音の謀反はとても衝撃なのだった。

夏美が本当の妹の様に可愛がっていた夕紀音が広州側に付いたからだ。

その後に夏美の前に嘗て両親を散らしたメイランの妹チェイリンが現れる。

その姿を見てそして事実を聞いた茜が怒りを狂いチェイリンに向かって突進していった。

果たして結果は・・・。

茜「第23夜。夏美の嘗ての妹分の再会そして謀反・・・そしてチェイリン。」

「次章もどうぞ宜しく頼む。」

以上です。有難うございました。

**第23夜。夏美の嘗ての妹分の再会そして謀反・・・そしてチェイリン（前書き）**

ご観覧頂きありがとうございます。

ほぼ毎回ありますが、今章は前章の後半みたいなものです。

毎度の事ながら編集可能性等あり予定です御了承下さい。

### 第23夜。夏美の嘗ての妹分の再会そして謀反・・・そしてチェイリン

アレからのワカバそして夏美に來た夕紀音の謀反はとても衝撃なのだった。

夏美が本当の妹の様に可愛がっていた夕紀音が広州側に付いたからだ。

その後に夏美の前に嘗て両親を散らしたメイランの妹チェイリンが現れる。

その姿を見てそして事実を聞いた茜が怒りを狂いチェイリンに向かって突進していった。

其れを高杉の所から少しだけ見ていた夏美はショックのあまり座り込んだままだった。

其れと同時にチェイリンに撃たれた左腕がすごく痛み出していた。

そして、額から汗が出る。

‘そう、其れはまるで焼けつくような痛み。’ 其れと同時に、いつの間にか脱水症状も起こし始めた。’

喉が渴く・・・血が欲しい。欲しい欲しい欲しい欲しい。

高杉はそれを見て驚きながら軽く舌打ちして「・・・さっきの銃弾で脱水症状起こしたか!」

三成はそれを聞いて慌てて夏美の所に駆け寄り高杉に向かって「此処は私がやるッ! 貴様はワカバに連絡しろ!」

高杉は一瞬驚いたがフツと笑い「ああ・・・分かったよ。じゃ、頼んだぜ。」 そう言いその場を後にした。

三成は急いで先程から出たにぎりしめた拳の傷を再度傷つけ血を出し夏美の口元へと運んだ。

「飲めッ！夏美！！」今の貴様には拒否はないッ！！！！」と飲ませた。

夏美はうつろなかも三成の血を飲み始めた。

ああ・・・甘いな。」「甘くてとてもおいしい。」「

私はもう・・・人間<sup>ヒト</sup>じゃないんだ。

ああ・・・浸みわたる。三成兄さま（あのひと）の血が・・・体に。」「

三成は夏美を見て「もう、終わりだ。夏美。」



そして三成の手から夏美の口が外された。

左腕の痛みもいつの間になくなっていった。

と同時にいつの間にか夏美は三成の腕の中にポスと入っていた。

三成はそれを見てフツと笑い只、夏美を抱き寄せていた。

そして茜の戦を見ていた。

茜は恨みつらみの顔して「許さない!!!! 許さない!!!! 私はず  
ンタ達を許しはしないッ!!!!」

ああ・・・茜。（茜はワカバに拾われた身となっているが昔・・・橘  
本家にも世話になっていた過去も持つ。）私の、茜そんな顔しない  
でくれ。

私はそんな顔をアンタにしてほしくないんだよ。本当はね。

茜は氷月でチェンレイ達に斬りかかり「アンタ達は、夏美様の御心を傷つけた！！！！」と同時に夕紀音を見て「そして・・夕紀音！アンタは・・夏美様のご恩を受けつつも其れを、仇で返した！！、裏切りと言う名の仇で！！！！そして広州と言う悪と手を組んだ！！！！その事がアンタの罪だ！！！！私はアンタも許しはしない！！！！夏美様とオウガ様が許されても私は許しはしない！！！！！！」そして悲痛な思いで「何で夏美様を裏切ったアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！？」と叫んだ。

そして氷月を構え直して「大人しく私に壊滅されろオオオオオ！！！！凍えよ！そして美しく舞えよ！我が氷よ！！氷蘭舞！！！！」

と氷の蘭の花びらを舞わせてそして夕紀音に喰らわせて夕紀音はそのまま壁に激突した。

茜はその方面に行き倒れ込む夕紀音に対して氷月の刃をさし向けて「・・答えろ！何故！！あのお方々（オウガ様方）を裏切った！？そして・・何故！！私を裏切ったアアアアア！！！！！！？」

茜と夕紀音は、親友同士、だった。しかも、ワカバの中では夏美とライカに次ぎ仲の良さはとてもすごかった。

茜もそんな夕紀音が大好きだった。とても優しくて此処強かった夕紀音。

‘信じていた。心から信じていた。’

夕紀音は血を吐きつつも「……あの方が私の恩人だったからよ。一応ご恩は仇で返せない。」

例えば夏姉さんやアンタにとって敵対している方だったとしても……。  
’」

茜はそれを聞いて虫唾が走ったような顔して「……だが、アンタは夏美様を悲しませた！裏切った！」

信じていた！！私さえも！！！！’」そして氷月の刃を夕紀音に振り落としながら「さらばだ！嘗ての我が

親友よ！！’」と言った。

そして夕紀音は、散って行った。’

‘嘗ての親友の手により。’

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8486m/>

---

ヘルシング。表と闇に生きる女そして、ある少女の出会い。

2011年11月13日12時35分発行